

# 人文会ニュース

2006. 10

巻頭エッセー 今、苦しむ子どもたち .....	水谷 修	1
書店現場から 人文書売場最前線 .....	北 哲司	4
心の哲学・心の科学への十五分ツアー .....	河野哲也	6
私の52年 前篇 .....	清水軍三	25
図書館の資料収集力の向上を! .....	瀬島健二郎	35
人文会活動報告		
人文会年次総会報告		
委員会活動方針		
特約店グループ訪問報告		

99

多彩な執筆陣がわかりやすく解き明かす。

**憲法が変わっても戦争にならない  
と思っ**ている人のための本

高橋哲哉・斎藤貴男／編著 4,535-51525-5 ©14700円

いちばんやさしい税金(タックス)入門

**タックスよ、こんにちは!**

茶の間で語らう親子のために

石弘光／著 4,535-55502-8 ©14700円

日本評論社 東京都豊島区南大塚3-12-4  
http://www.nippon.co.jp/ TEL: 03-3987-8621 (価格は税込)

ジョルジュ・ティティユベルマン 著 橋本二徑 訳

**イメージ、  
それでもなお**

アウシュビッツからもぎ取られた四枚の写真  
証言や写真がどこか届くはずだと信じた希望なき  
人びとへの応答責任として、全てに抗して、断片的  
な資料から絶滅の歴史を再構築せんとする強靱な  
意志。イメージ人類学の果敢な実践。解説 田中純

3990円(税込) A5判/340頁

〒112-0001  
東京都文京区白山2-29-4  
TEL 03-3818-0874 http://www.heibonsha.co.jp/

平凡社

法政大学出版局  
http://www.h-up.com/

松下圭一著 ..... A5判/3150円

**現代政治\*発想と回想**

半世紀を超える研究と運動の足跡を回想しつつ、  
現代政治の焦点を縦横に語る。大衆社会論から  
都市型社会、政策型思考、シビル・ミニムム、  
公共政策、市民立憲等々におよぶ鋭い問題提起

松蘭 斉著 ..... A5判/4725円

**王朝日記論** 叢書・歴史学研究

平安王朝の貴族らが皆々と書き綴った日記の発  
生・展開・終焉の過程を跡づけるとともに、そ  
の機能と意義を「情報史」の視点から考察する

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7  
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

「20世紀ユーラシア大陸に現出したグラグという名の巨大粛清  
マシーン。独裁権力が生んだ壮絶なまでの不条理。恐るべきリ  
サーチ力と、息づく人間的想像力。スターリン時代に、私ほ  
うどんな幻想も許さない。」—— 亀山郁夫

**グラグ**  
ソ連集中収容所の歴史  
GULAG

アン・アプルボーム「川上流/訳」 ■5460円

『収容所群島』以来の衝撃! グラグ、すなわち「収容所(ラ  
グ)」「管理総局」の始まりから終焉までの全歴史を明快に叙述  
「20世紀史」の見直しを迫る渾身の書。ビュリツァー貴重著作

白水社 東京都千代田区神田小川町 3-24  
tel.03-3291-7811/fax.03-3291-8448  
http://www.hakusuisha.co.jp \*価格は税込

## 今、苦しむ子どもたち

水谷 修

夜の町に虚ろにたむろする子どもたち。夜の暗い部屋で泣きながらリストカットやOD（処方薬の過剰摂取）をし、死を考える子どもたち。また実際に自殺してしまう子どもたち。家から部屋から出ることができなくなり、不登校や引きこもりになってしまいう子どもたち。今、日本の子どもたちの多くが、心を病み苦しんでいます。

私が二年前の二月にメールアドレスを公開し、子どもたちからの相談を受け始めてから、現在までに約二二万件、のべ一万人の子どもたちから、さまざまに相談がありました。一割は、薬物乱用や非行・犯罪等、夜の世界に関わる「夜眠らない子どもたち」からの相談、九割は、夜の暗い部屋でリストカットやODを繰り返しながら死を考える「夜眠れない子どもたち」からの相談でした。

「先生、覚せい剤がやめれない」「先生、死にたい」「先生、不登校で親を苦しめている。私なんか死んだ方がいいんだよね」「先生、虐められてる。助けて」数限りない子どもたちの悲鳴と向き合ってきました。そのほとんどのメールは、深夜の夜の町や暗い部屋からのものでした。

今、自分の周りの子どもたちの心の状態を見ることは簡単です。その子どもが毎日夜をどう過ごしているのか見ればいいんです。もし、毎日部屋で寝ていれば安心でしょう。でも、週末部屋にいなかったり、毎晩涙ぐみながら眠れずに過ごしていたら……。

今、日本の多くの子どもたちが苦しんでいます。その原因の一つは、明日を夢みることができなくなってしまっていることです。でも、それは当たり前前のことに思えます。親や教師、子どもたちを取り巻く大人たちは、自分たちのどの

ような姿を日々子どもたちに見せているでしょう。笑顔で幸せな姿ですか。それとも、日々を苦しむ不機嫌な姿ですか。多分後者の方がはるかに多いはずですよ。そんな大人たちの姿を見ていたら、子どもたちはどう思うでしょう。「どうせ大人になったってろくなことはない。だったら今を楽しもう」と明日を捨ててしまうのではないのでしょうか。

また、もう一つの理由は、現在の私たちの社会の攻撃性にあると考えます。今、私たちの社会は、いらいらしていません。職場、学校、家庭すらも、優しいことが消え、厳しい攻撃的なことばで満ちています。特に子どもたちは、家庭で学校で、日々叱られ、日々「頑張れ」と追いつめられています。大人ですら、会社や家庭で日々自分を否定され厳しいことばをかけられ続けられ、心を病むのではないのでしょうか。ましてや、子どもたちは。このような状況の中で、自己肯定感を失い、自分の存在が親や人に迷惑をかけていると、自分を責めています。そして、自暴自棄になったり、夜の世界の偽りの優しさにすがったり、暗い部屋で一人泣きながら死を考えています。

かつて、家庭や学校で叱られ、否定され続けた子どもたちの多くは、夜の世界へ戻っていきました。しかし、今子どもたちは、その氣力を失っています。夜の町で、夜の暗い部屋で、昼の世界ですら、多くの虚ろな目をした子どもたちがあふれています。

増え続ける不登校や引きこもりの子どもたち。なぜ、子どもたちは学校との関係を絶つたり、社会との関係を絶つのでしょうか。それは、その子どもたちにとって、学校や社会が優しいものでなく、自分を否定する攻撃的なものだからではないのでしょうか。不登校の原因は、その生徒にあるのでしょうか。その学校の中に問題はないのでしょうか。引きこもりの原因は、私たちの今の社会のあり方に問題があるのではないのでしょうか。

増え続けるいじめ、なぜ子どもたちは大切な仲間をいじめるのでしょうか。楽しい家庭や楽しい学校に生きる子どもたちは、こんな卑劣なことしません。いじめる子どもたちも、家庭や学校で追い込まれた子どもたちなのではないのでしょうか。

真つ白な心で明日を夢みて生まれてきた子どもたちを、このように追いつめているのは私たち大人なのではないのでしょうか。暖かい家庭や学校に恵まれたら、どの子が夜の町に行くのでしょうか。夜の暗い部屋でからだを傷つけ、死を考

えるでしょうか。子どもたちは、私たち大人からの優しさ待っています。

大人の方たちに聞きます。あなたの子ども、関わっている子どもたち、良いところと悪いところどちらが多いですか。今、何か親や教師、大人たちが、子どもたちのあら探しをしているように見えます。悪いところを重箱の隅をつつくように見つけ、そして叱る。これは、大人社会でも同様に見えます。でも、人は、まして子どもは、日々叱られ続け、否定され続けたらどうなるのでしょうか。

日本は優れた国です。かつて先人は「子どもは、十誉めて一叱れ」といいました。誉めることで、自己肯定感を持たせ、人間関係を作り、そして一つ指導する。その原点に戻りませんか。

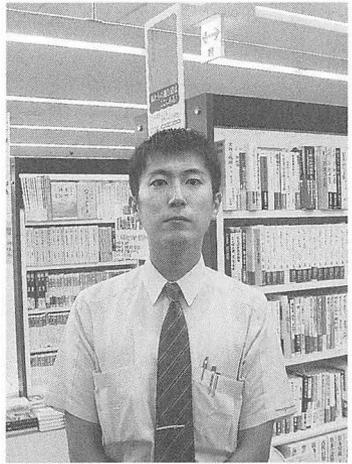
(みずたに おさむ・元高校教諭)

## 人文書売場最前線

北 哲司

書店の現場の仕事というものは傍目から見ると毎日が単調な繰り返しに見えるに違いない。日曜日には各新聞の書評のチェックから始まり、書籍の発注、棚差し、そして接客と一日が終わり、毎週、毎月、毎年同じことが続いていく。では、同じことの繰り返し、しかも人文書というジャンルの中でも最も難解で訳がわからない（と、人によく言われる）哲学・思想分野を丸三年も担当してきてもウンザリかと尋ねられたら、ちよつと首をかしげてそれでもないなあと答えるだろう。結構毎日楽しくやっている。学生のとときに哲学専攻だったわけでもなく、担当になった最初の半年は知らない著者名、キーワードばかりでどう棚を管理しよいいものやら呆然としたものだ。それでも本を触っていく内に知識は増えていく。入門書や概論を読み、棚の流れを覚えつつ参考文献を欠本補充する。出版社の担当さんから話を聞く。哲学に詳しくそうなお客様で、なるべくやさしそうな人を捉まえて話を聞いてみる（ひよつとするとやりすぎかもしれない）。そんなことをやっている、ある日突然著者と著者の繋がりが分かる。ジグゾーパズルのように自分の知識と知識があるべきところに嵌まっていくような爽快感がある。前担当者から引き継いだ棚が自分の棚に変わっていくのだ。その充実感はちよつと変えがたい。

棚には流れがある。哲学分野を例にとると、左から右に時代区分が下るように棚を構成していく。総論が先に来て各論は後、哲学者だと著作が前に来てその哲学者に対する解説書は後など本の並べ方には大体のルールがある。そして棚を作るに当たってさまざまな制約があるが、一番頭を悩ますものはスペースの問題だ。与えられている棚本数の中ではすべての本を棚に出すことができるわけではない。書評に取り上げられた新刊の著者の既刊を棚下から引っ張り出し、



筆者近影

その代わりに動かなくなってきた本を棚下に入れる、棚に出している本でしばらく動いてないものは一度棚下に入れ代わりの本を入れてみる、また平台に関してもテーマを決めミニコーナーを作りなるべく時事性を持たせるなど限られたスペースの中のやりくりに頭をひねらすのだ。

先日、人文会の会議に出席する機会を得た。会議の主題は『人文書のすすめ』の分類見直しについてであったのだが、書店と出版社を交じえてのかなり白熱した会議になった。他書店の人文担当者や出版社サイドからの人文書に対する定義や意見を聞く機会などめつたにない経験であり、刺激を受けると同時に自分も意見を述べることによって自分の棚に対する認識を再確認することになった。書店はさまざまな過程を経て出来上がった本とお客様が最終的に出会う場所である。そして書店の棚はお客様とのコミュニケーションの中から作られていく。これからお客様が目的の本を探しやすく、そして棚をご覧になることで新たな発見があるような、そんな魅力的な場所作りを心がけていきたい。

(きた てつし・八重洲ブックセンター本店)

## 心の哲学・心の科学への十五分ツア―

### 一 心身問題と心の哲学

「心の哲学」とは、「心と身体はどのように関係しているのか」「心はどこにあるのか」「心は因果的効力をもちうるか」「心の科学はどのような方法論に則ればよいか」「そもそも心とは何か」といった心身関係や心の定義、心の科学（実験心理学・臨床心理学・応用心理学・認知科学・コンピュータ科学・脳科学など心を扱う科学の総称）の基礎や方法論を問う哲学の総称である。

「心の哲学」という呼び名は一般の読者にはいまだに馴染みがないかもしれないが、内容的に言えば、心身問題から発展してきた分野であり、最終的には、「死後の生はありうるか」「自分とは何者か」といった人間にとって根源的な問いから発している。しかし、古い地層に

### 河野 哲也

根ざしているとは言え、心の哲学の議論の多くは、近代科学の発展とともに展開してきたものである。近代科学は、中世までの目的論的自然観を退け、自然とは必然的な法則によって運動するだけの一種の機械であるという機械論的自然観を提出した。自然が機械であり、身体もその一部にすぎないならば、私たちは自由な思考や意志を持ちえるのか。自然の世界のなかに心をどのように位置づけたらよいか。これがデカルトたち近代初期の哲学者・科学者が直面した問題であった。

心身問題については、一九世紀末までには四つの解答があった。ひとつは、デカルトに代表されるように、心身をそれぞれ独立した実体として捉えたうえで因果作用を認める相互作用説である。だがこの立場は多くの矛盾を含んでいる。そこで、心身のあいだには対応関係はあるが因果関係はないと主張する平行論がマールブランシ

ユヤライブニッツによつて唱えられた。その後には、二元論を回避しようとする一元論的な傾向が生まれる。ひとつは、心的なものを物的なものに還元しようとする唯物論であり、一七世紀ではホッブズ、一八世紀ではドルバックやド・ラ・メトリなどによつて唱えられ、一九世紀のフォイエルバッツハやマルクスによつて徹底化される。他方、物的なものを心的なものに還元しようとする立場は唯心論と呼ばれる。唯心論はいくつかの例外はあるが比較的近代的な主張である。そこには、バークリ、ヘーゲル、ベルクソンなどの名前を含めることができる。これらの古典的立場については、S・プリースト『心と身体の哲学』（勁草書房）にうまくまとめられている。

## 二 現代の心の哲学の誕生

二〇世紀初頭において心身論はやや低調になるが、四〇年代になると、きわめて重要な二つの哲学的著作が発表される。ひとつはメルロ＝ポンティの『行動の構造』（みすず書房）で、もうひとつはライルの『心の概念』（みすず書房）である。この二人の哲学者はそれぞれ現象学と分析哲学という現代哲学の二大潮流を代表しているが、興味深いことに、「行動」という概念に着目して

心身問題を克服しようとする点で共通している。

しかし一般的に言えば、現象学と分析哲学では心身問題は異なった方向性で論じられる傾向がある。一方の現象学は、意識に内在する視点から出発して、私たちの経験にはすでに身体性が組み込まれていることを見いだそうとする。すなわち、意識の身体化によつて二元論を克服しようとする。これに対して分析哲学では、「いかにして物体（身体、脳）から心が生じるか」という問題に解答しようとする。物体を精神化しようとするのである。しかしながら、メルロ＝ポンティとライルはこうした問題設定をしなかった。二人は、「心」と「物」という二分割を受け入れた時点で、デカルトの罫にはまってしまうことに気づいていたのである。

意識経験のなかに身体性を見出す現象学的な試みが比較的容易であつたのに対して、「物体からいかにして心が生じるか」という分析哲学の問いは困難を抱え込んだ。（一般的に「心の哲学」という場合、こちらの分析哲学の流れを指すことが多い。）さらに、二〇世紀後半はさまざまな心の科学が発展した時代でもあり、その成果を取り込む形で心の哲学は拡張してきた。とくに、心理学に「認知革命」が起こり、行動主義から認知主義への転換が起こると、実験心理学とコンピュータ科学と脳科学

が相互に乗り込んだ研究が生まれてきた。認知主義が興隆する経緯については、ガードナー『認知革命』（産業図書）に詳しい。

心、コンピュータ、脳。端的に言えば、心の哲学の主要テーマはこの三つにあると言つてよい。あるいはここに、「動物は心を持ちうるか」「動物と人間の行動はどこが違うか」といった比較行動学や動物心理学に関係したテーマを加えてもよい。

しかし他方において、心の哲学の議論の俎上にはほとんどほらないテーマあるいは分野もあることに注意しなければならぬ。たとえば、社会・集団心理、コミュニケーション、人間関係など社会的な相互作用に関わる諸問題は、まず分析哲学系の心の哲学では取り上げられない。臨床心理学や精神医学における病理的現象も扱われない。文化や制度、あるいは「時代精神」のような問題も論じられない。つまり、私たちの行動のうちで複数の人間と関わりを持つようなものは、まるきり心の哲学のテーマの範囲外に置かれているのである。その理由は、おそらく、分析哲学系の心の哲学では、心は自然現象の一種として捉えられているからである。これらのテーマについてはむしろ現象学の方がコミットしてきた。このことから、分析哲学と現象学の双方のバイアスと長所短

所が分かるだろう。

以下では、心の哲学とそれに関係の深い心の科学の動向と文献を紹介する。だが、日本語で読める文献に限つたとしても、心の科学の範囲はあまりに広い。「比較的最近の」、「一般の読者にも近づきやすい」、しかも「私が読んで関心を持ったもの」、というきわめて恣意的な基準によつて紹介することになるが、この点はお許し願いたい。

### 三 心の哲学の展開と認知科学

現代の心の哲学は、きわめて多岐にわたるテーマと多様な立場を含んでいる。したがつて、この分野を知りたいければ、最初に全体を眺望できる入門書を読んだほうが効率的である。幸いこの数年でたいへん良質の入門書や概説書が出版されている。

やや古典的ながら、ホフスタッターとテネットの『マインズ・アイ』（上・下、TBSブリタニカ）は初心者にはぜひ読んでほしい本である。ジョン・サールは言語哲学者であるとともに、心の哲学を牽引してきた代表的論者でもあるが、『マインド』（朝日出版社）では、「意識」「志向性」「自由意志」「知覚」「自己」などテーマ

ごとに議論を紹介している。信原幸弘編の『シリーズ心の哲学』（全3巻、勁草書房）は、この分野の最新の動向を知るうえで必携である。1〜2巻は、現代の日本の研究者による独自の貢献を紹介しており、3巻では、キム、ミリカン、チャーチランド、バージ、ハーマンといった活躍中の哲学者による基本的かつ重要な文献を翻訳している。柴田正良の『ロボットの心』（講談社現代新書）は、見通しがよく、初心者向けの分かりやすい入門書である。

また、心の科学の全体像を与えてくれる概説書としては、オックスフォード必携シリーズで、アンダーウッド編の『心の科学ガイドブック』（岩波書店）が使いやすい。入門的な必読書紹介としては、岩波書店編集部編『ブックガイド（心の科学）を読む』がある。石川幹人の『心と認知の情報学』（勁草書房）は、情報学的な視点から目配りよくコンピュータ科学、ロボット、進化心理学、認知神経科学、意識の問題を概説している。足立自朗ほか編著『心とは何か』と渡辺恒夫ほか編『心理学の哲学』（ともに北大路書房）は、心理学の基礎と方法論について考察したアンソロジーで、日本では類書がない。石川幹人・渡辺恒夫編著の『マインド・サイエンスの思想』（新曜社）は、心の科学の基礎論に関わる哲学

的争点を網羅的に論じており、たいへん便利である。

話を心の哲学に戻すと、現代の心の哲学はこの三〇年ほどでじつにさまざまな基本的立場を生み出してきた。まず、哲学的（論理的）な行動主義の代表として、先のライルの著作をあげられる。（哲学的行動主義は、心理学的行動主義と共通の主張を持ちながらも同一視はできない。とくに条件付けなどの方法論について賛成しない哲学者は多い。）彼はデカルトの精神実体論を「機械の中の幽霊」として論破し、心とは顕在的・潜在的な行動のパターンのことだと指摘する。この著作以降、哲学では精神実体論が支持されることはなくなった。しかしデカルトとは異なつた形で心と脳の相互作用説を唱えようとする努力も存在する。科学哲学者のポパーと脳生理学者のエクルズの共著『自我と脳』（上・下、新思案社）はそうした試みである。

二〇世紀後半では、神経生理学が飛躍的に進歩したが、それに伴い、「心とは、行動そのものではなく、その原因となる脳状態のことである」と主張する立場が現れた。この考えは「心脳同一説」と呼ばれるが、脳科学者のみならず一般の人にも受け入れられている。哲学的立場としては、「ある心的タイプはすべてある物理的タイプと同一である（たとえば、「痛み」にはつねに同じパター

ンの興奮が生じる」とする「タイプ同一説」と、「ある個別の心的な出来事は、ある個別の脳の出来事と同一である」とする「トークン同一説」が区別される。現代哲学では、前者は心的状態の多重実現性ゆえに誤りだと見なされている。

心脳同一説を代表する哲学的著作としては、ファイグルの『心ころとも』(勁草書房)と、アームストロングの『心の唯物論』(勁草書房)をあげられる。しかしながら脳科学に関心を持つ人たちにぜひ読んでいただきたいのは、心と脳は同一であるとしながら、その法則性を否定する「非法則的一元論」を唱えたデイヴィドソンの論文(『行為と出来事』勁草書房、所収)である。デイヴィドソンの議論は、トークン同一説と付随性<sup>5</sup>、<sup>6</sup> *pervenience* という重要な概念を提起することになる。パトリシア・S・チャーチランドは、『ブレインワイズ』(新樹会創造出版)において、脳科学の知見に沿って自己、意識、表象、学習を説明する神経科学的哲学を展開している。

一方、心の哲学は、コンピュータ科学や人工知能研究など認知科学との関連もさわめて深い。認知科学との対話を通して心身問題や心脳問題に取り組む哲学は、「認知哲学」と呼ばれる。「心はコンピュータ(記号処理を

する構文論的プログラム)である」という発想そのものはホップズにまで遡れるが、近年のコンピュータ・テクノロジーの進歩によってこのアナロジーは現実味をもつに至った。人間の心を記号計算に比する立場は「古典主義(古典的計算主義)」と呼ばれる。先の『マインズ・アイ』にはチューリングの先駆的な論文が収められている。認知科学者ピリシンの『認知科学の計算理論』(産業図書)、視覚研究者マアの『ヴィジョン』(産業図書)はこの立場の代表である。

しかし古典主義にはさまざまな批判が集まることになる。「中国語の部屋」という思考実験によって古典主義を批判したサールの『心・脳・科学』(岩波書店)、現象学的観点から人間の心と人工知能の相違を指摘したドレイファスの『コンピュータに何ができないか』(産業図書)、人工知能研究者のウイノグラードとフロレスの『コンピュータと認知を理解する』(産業図書)は、必読の古典主義批判である。マッカーシーとヘイズの『人工知能に哲学はなぜ必要か』(哲学書房)は、古典主義にとつて躓きの石となるフレイム問題について論じている。フォードは古典主義の代表格であるが、『精神のモジュール形式』(産業図書)ではフレイム問題の困難について論じている。

八〇年代になると、古典主義に代わってコネクショニズムという立場が現れた。コネクショニズムとは、人間の神経細胞の結合をモデルとした並列分散処理（PDP）をコンピュータに実装することで人工知能を作り出すようにする立場である。古典主義とは異なり、前概念的・前記号的と呼ばれるレベルの表現が可能になる。ラメルハートたちの『PDPモデル・認知科学とニューロン回路網の探索』（産業図書）、甘利俊一『神経回路網モデルとコネクショニズム』（東京大学出版会）は、コネクショニズムの基本発想を提示している。この立場の哲学的含意を論じたものとして、P・M・チャーチランド『認知哲学』（産業図書）、クラーク『認知の微視的構造』（産業図書）、戸田山和久他編の『心の科学と哲学・コネクショニズムの可能性』（昭和堂）がある。コネクショニズムに分類できないが、ミンスキーは、『心の社会』（産業図書）において、心を多数の単純な機能エージェントから組織された社会だという見方を示した。神経科学の方でも心を神経ネットワークの視点から捉える視点が出されている。たとえば、岡野憲一郎は、『心のマルチ・ネットワーク』（講談社現代新書）という脳と心の多重理論を提案している。スコットは、『心の階梯』（産業図書）で、自然を創発的な階層として捉え、

意識もニューラルネットから創発するものだと説く。脳科学と人工知能研究は相互的に影響を与えているのである。

以上の人工知能研究の発展の流れと今後の展望をつかむには、計算主義的立場に立った住居彰文の『心の計算理論』（東京大学出版会）、並列コンピュータの第一人者であるヒリスの『思考する機械 コンピュータ』（草思社）、人工知能発展の歴史を見やすく説明しているフランクリンの『心をもつ機械』（三田出版会）、ウィリアムズ『人工知能のパラドックス』（工学図書）、チューリングの思想と生命の問題を扱った『甦るチューリング』（NIT出版）を読むとよい。また、現象学の立場から人工知能研究を批判的に検討したアンソロジーとして、門脇俊介・信原幸弘編『ハイデガーと認知科学』（産業図書）があり、重要な論文が多数収録されている。

#### 四 志向性とクオリア

次に重要なトピックごとに文献案内する。現代の心の哲学では、心的なものの本質は、志向性（世界内の対象や事象に向かう働き）とクオリア（意識に現れる質感）にあるとされている。

志向性の概念は、ブレンターノによって提起され、フツサル現象学に継承されたことで有名だが、分析哲学においてもサルが『志向性』（誠信書房）で詳細に論じている。デネットは、『志向姿勢』の哲学（白揚社）において、心的状態とはあるシステムを志向的態度から理解することによってそのシステムに帰属させられるという解釈主義の立場を提起した。さらに、『ダーウインの危険な思想』（青土社）や『心はどこにあるのか』（草思社）では、志向性を身体をも含んだ一全体全体のシステムとして捉え、その発生を進化論的に説明しようとする。デネットは心の哲学の第一人者であり、すべての著作が必読書である。

志向性は、しばしば、外界の心的表象を形成することとして定義されるが、クレインの『心は機械で作れるか』（勁草書房）は入門書の体裁をとりながらも、表象の問題に焦点を当てている。現象学と分析哲学を総合する立場からは、門脇俊介が『フツサル』（NHK出版）と『理由の空間の現象学』（創文社）で、志向性を間主観的な「理由の空間」として捉える立場を提示している。

志向状態の表象内容は、主体の内部状態だけによって決定できず、環境のあり方に言及せざるを得ないとす

る立場は「外在主義」と呼ばれ、現在では哲学者の多くが支持している。パトナムは、心の哲学のみならず分析哲学の重鎮であるが、彼は、「双子地球」あるいは「桶の中の脳」（「理性・真理・歴史」、法政大学出版社）という思考実験によって外在主義を提起した。『シリーズ心の哲学』（III翻訳篇）に収められたバージの「個体主義と心的なもの」も説得力ある論文である。あるいは、『行動を説明する』（勁草書房）の著者であるドレッキは、終始一貫して心的内容の外在主義をとりながら、志向性について実在論的な立場を主張している。

一方、意識とその質的狀態であるクオリアは、哲学のみならず、脳科学でもホットな話題となっている。「物質に他ならない脳からいかにして意識が生まれるのか」という問題は「意識のハードプロブレム」と呼ばれ、科学では解決不能の神秘と考えている人もいる。ネーゲル『コウモリであるとはどういうことか』（勁草書房）、チャルマーズ『意識する心』（白揚社）、マツギン『意識の（神秘）は解明できるか』（青土社）は、哲学者によるクオリア論である。河村次郎は、『脳と精神の哲学』『意識の神経哲学』（ともに萌書房）において、意識やクオリアが脳から創発する性質であるという創発主義を唱えている。神経科学者のラマチャンドランも（ブレイクスリ

いと共著)、『脳のなかの幽霊』(角川書店)で、比較的多くの分量をクオリアに割いている。日本では、脳科学者の茂木健一郎がこの問題について継続的に議論し、多数の著作を出版している。『脳とクオリア』(日経サイエンス)と『クオリア入門』(ちくま学芸文庫)を代表作としてあげておく。

しかしながら、クオリアは擬似問題であるとの指摘もある。たとえば、先にあげたデネットは、『解明される意識』(青土社)でクオリアの消去を試みている。日本における心の哲学の第一人者である信原幸弘は、『心の現代哲学』(勁草書房)、『考える脳・考えない脳』(講談社現代新書)、『意識の哲学』(岩波書店)といった一連の著作で志向性とクオリアの問題に取り組み、クオリアは主観的な例化された性質ではなく、経験の志向的特徴であるとする説得力ある主張を展開している。また、パトナムは近著『心・身体・世界』(法政大学出版局)において、「自然な実在論」の立場を提案しつつ、クオリア概念そのものを批判している。この本でパトナムはキムの付随性概念も批判しているのだが、私にはこの新著は近年の心の哲学における最も重要な成果に思える。

## 五 脳と自由意志

最近の脳科学の研究を見ると、著名な学者が、意識や自己の問題を扱った著作を続けざまに出している。とくに、脳の活動を生命維持や身体というより大きな枠組みで扱おうとする試みは興味深い。

ダマシオは、哲学的な素養に満ちた深い考察を行うことで知られ、その著作はいつも刺激的である。『生存する脳』(講談社)では、身体を考慮せずには心の働きについて説明できないとして、脳と身体ダイナミックな相互作用を指摘した。『無意識の脳 自己意識の脳』(講談社)では「自己感」の問題を扱い、『感じる脳』(ダイヤモンド社)では、スピノザの哲学と重ね合わせながら、情動と感情が私たちの生存にとって根源的な役割を果たしていると論じる。下條信輔の『意識』とは何だろうか(講談社現代新書)も、心を身体を介して世界と相互作用する存在として捉える観点を示している。彼の「脳の来歴」という発想は斬新である。腰原英利の『意識をつくる脳』(東京大学出版会)は、脳を生体の統合と制御機構として、脳の働きをダイナミックな自己維持的な生命機構の一部と捉えようとしている。

先のラマチャンドランも、『脳のなかの幽霊』（角川書店）、『脳のなかの幽霊、ふたたび』（角川書店）において、幻肢や病態失認、ミラーニューロンなど、自己認識に関わる興味深い研究成果を紹介している。ルドウー『シナプスが人格をつくる』（みすず書房）、ファインバーク『自我が揺らぐとき』（岩波書店）、ブロックス『脳の彼方へ』（青土社）は、いずれも神経科学の観点から自己の問題を扱った著作である。キナンの『うぬぼれる脳』（NHKブックス）は、鏡像と自己意識について論じていて興味深い。

自己を論じる際に重要なのが、主体性の問題、すなわち自由意志での問題である。運動を生み出す脳内事象が、意志決定が意識にのぼる以前にはじまっていることが発見されると、自由意志の存在が疑われるようになった。二〇〇四年に京都賞を受賞したJ・ハーバーマスの受賞講演は、脳科学的決定論から自由意志を守ろうとする趣旨であった。神経生理学の観点からは、ノーレットランダーシュ『ユーザイリュージョン』（紀伊國屋書店）とリベット『マインド・タイム』（岩波書店）が、哲学からは、デネットの『自由は進化する』（NIT出版）がこの問題について論じている。前野隆司『脳はなぜ「心」を作ったのか』（筑摩書房）も、自己・クオリア・

自由の問題を「受動的な自己」という概念で解決しようとしている。

ところで、他者理解を「心の理論」で説明しようとしたバロン・コーエンが『共感する女脳、システム化する男脳』（NHK出版）という著作を出した。しかし、この種の性差に関する脳科学的研究には、古典的なジェンダー観を強化するものはあっても、「性転換する脳機能」とか「両性具有的な脳」とか「同性愛の脳科学的正統性」とかいった従来の性差観を問い直すような研究が見当たらないのはなぜだろうか。分離脳研究で有名なガザニガは、『脳のなかの倫理』（紀伊國屋書店）で、脳研究を倫理的・道徳的な視点から考察している。今後、脳研究を倫理的な視点から検証してゆく活動が、応用倫理学の一部として求められているだろう。

## 六 身体とロボット

古典主義に対する批判として、心には身体性が不可欠であると指摘するものがあつた。身体役割を考へるうえでロボット研究は重要な知見をもたらしてくれる。

マサチューセツ工科大学（MIT）のブルックスは、一九八六年にサブサンクション・アーキテクチャーを提

唱して、人工知能研究や認知科学を震撼させたが、ようやく彼の翻訳が出た。『ブルックスの知能ロボット論』（オーム社）は心の科学の必読書である。ファイファーとシャイアーの『知の創成・身体性認知科学への招待』（共立出版）は、フレーム問題や記号接地性問題を身体性によって解決してゆこうとする。筆者はファイファーの五年ほど前の来日講演に出席したが、本当に知的な興奮を味わったものである。土井利忠ほか編『脳・身体性・ロボット』（シュブランガー・フェアラーク東京）は、インテリジェンス・ダイナミクス（動的知能学）、身体性認知科学、認知発達ロボティクス、表相主義（前もつてのプログラミングが外界とインタラククションすることで機能が創発する）、構成論的脳科学といった新しい人工知能ロボットについて論じている。月本洋『ロボットのこころ』（森北出版）、月本洋・上原泉『想像』（ナカニシヤ出版）は、言葉の意味とは仮想的な運動であり、ロボットに意味を理解する想像力をもたせるには身体性が必要だという身体運動意味論を展開している。

また、伊藤宏司編著『知の創発・ロボットは知恵を獲得できるか』（NIT出版）では、ロボットとロボット、ロボットと環境の相互作用により群ロボットとして全体として機能が創発されてゆく仕組み（「群知能」）の研究

をしている。ユニットひとつひとつにコンピュータとアクチュエーターを搭載し、互いの結合を組替える能力を持たせることでシステム全体の形態や機能を変えられる「ユニット機械」を作り出すのである。すごい発想に思えるが、生物界ではごく当たり前の現象だと著者は言う。石黒浩たちは『コミュニケーションロボット』（オーム社）において、人間とコミュニケーションするロボットの可能性を探る。知的活動はしばしば個体間の社会的相互作用から生まれる。ロボット研究はこうした課題に取り組める点が素晴らしい。個体間の共同作業や相互作用を論じる観点は、残念ながら、従来型の人工知能研究や脳科学にはあまり見当たらない。その理由は、それらの研究が個体の内部機構を調べるといふ意味で、医学モデルにしているからである。個人的には、従来型の人工知能研究や脳科学よりも、ロボット工学（と動物行動学）の方がはるかに面白く、引き付けられる。

その他の最近の研究として、星野力『ロボットにつけるクスリ』（アスキー出版局）、中村仁彦『ロボットの脳を作る』（岩波書店）、喜多村直『ロボットは心を持つか』（共立出版）、三浦宏文『ロボットと人工知能』（岩波書店）、グラント『アンドロイドの脳』（アスペクト）、松原仁『鉄腕アトムは実現できるか？』（河出書房新社）、

館障『ロボット入門』（ちくま新書）、けいはんな社会的  
知能発生理学研究会編『知能の謎』（講談社ブルーバック  
ス）をあげておく。

## 七 ギブソンと環境主義

先に論じた心的内容の外在主義を徹底化して、アメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンの観点と結びつけたのが、「環境主義」と呼ばれる立場である。

ギブソンの心理学は、知覚研究に生態学的観点を持ち込み、心理的な事象を動物と環境の相互関係から理解しようとした。そこには、パトナムに先んじて、心と環境のあいだに媒介項（「インターフェイス」）を設ける近代的認識論を根本から批判するアイデア（直接知覚論とアフォーダンス）が含まれている。ギブソンの著作として『生態学的視覚論』（サイエンス社）、『ギブソン心理学論集』（勁草書房）が訳出されているが、残りの二つの主著の翻訳も待たれる。妻のエレノア・ジャックによる『アフォーダンスの発見』（山岩波書店）、および、生態学的心理学の重要論文を集めた佐々木正人・三嶋博之編訳『生態心理学の構想』と『アフォーダンスの構想』（ともに東京大学出版会）は必読である。

日本においては、佐々木正人がこの分野の先導的心理学者であり、独自の研究を進めている。著書として、『アフォーダンス』（岩波書店）、『知性はどこに生まれるか』（講談社現代新書）、『知覚は終わらない』（青土社）、『ダーウインの方法』（岩波書店）などがある。三嶋博之の『エコロジカル・マインド』（NHK出版）は説得的な論述がなされ、この分野にすばらしい見通しを与えている。佐々木編による『アフォーダンスと行為』（金子書房）は、行為と知覚の相互依存性と身体のシステム理論についての研究を集め、『レイアウトの法則』（春秋社）では、ギブソン心理学の芸術への応用を見ることができ、環境主義は応用範囲がきわめて広い。また、境敦史ほかによる『ギブソン心理学の核心』（勁草書房）は、実験現象学の観点からギブソンの心理学を歴史的に検討している確かな研究である。

言語学の分野では、本多啓『アフォーダンスの認知意味論』（東京大学出版会）が注目される。本多は、構文現象（英語の中間構文、連結的知覚動詞構文、主体移動表現）が探索活動とアフォーダンスに動機付けられていることを証明している。

生態学的心理学に親近性をもち、「環境主義」に含め  
てよい認知科学的研究としては、サッチマンの『プラン

と状況的行為』（産業図書）に代表される状況認知研究、先に取り上げたブルックスのロボット研究、ヴァン・ゲルダールの力学系アプローチなどがあげられる。また、認知における（自然的・社会的）状況の役割に注目した上野直樹の『仕事の中の学習』（東京大学出版会）、および、金子書房の「状況論的アプローチシリーズ」（上野直樹ほか編著『状況のインターフェイス』、『認知的道具のデザイン』、『実践のエスノグラフィ』）は、社会学や文化人類学の分野に広がる重要な仕事である。トマセロの『心とことばの起源を探る』（勁草書房）は、ヴィゴツキーの観点を取り入れ、言語獲得を間主観的な相互作用と文化的・歴史的環境のなかにすえて理解しようとした最重要の仕事である。認知科学者ノーマンの『誰のためのデザイン？』『ひとを賢くする道具』『テクノロジー・ウォッチング』（いずれも新曜社）は、アフオーダンスの理論をテクノロジーデザインに活かそうとする斬新なものであり、むしろこのノーマンを介してギブソンは認知科学に受け入れられた側面が強い。

最後に、ギブソン心理学を哲学的観点から論じたものとして、科学史のなかにギブソンを位置づけたロンバードの『ギブソンの生態学的心理学』（勁草書房）、ギブソン心理学を環境主義へと拡張したリードの『アフオーダ

ンスの心理学』（新曜社）、生態学的心理学に含まれる認識論と存在論を展開した河野哲也の『エコロジカルな心の哲学』（勁草書房）、『環境に拓がる心』（勁草書房）、『心』はからだの外にある』（NHK出版）をあげておく。

紙面が足りず、対人の認知科学（「心の理論」と自閉症研究）、比較心理学と動物行動学、発達心理学、システム理論については紹介できなかつた。また、認知科学の成果を取り入れた現象学の新しい動向や、心の科学を批判的・理論的に検討する理論心理学や新しい心理学史や心の科学のサイエンス・スタディについて紹介できなかったのも残念である。別の機会を与えていただければ幸甚である。

（河野哲也・このつや） 玉川大学文学部人間学科助教  
授、博士（哲学）

専門は、哲学（心の哲学、現象学）、倫理学（ビジネス倫理、科学技術倫理）。著書として『メルローポンティの意味論』（創文社）、『エコロジカルな心の哲学』（勁草書房）、『環境に拓がる心』（勁草書房）、『心』はからだの外にある』（NHK出版）、『レポート・論文の書き方入門』（慶応大学出版会）など。

## 心の哲学・心の科学への15分ツアー・ブックガイド

### 1 心身問題と心の哲学

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
勁草書房	4326153415	心と身体の哲学	S・プリースト	3700	1999年

### 2 現代の心の哲学の誕生

産業図書	4782800371	認知革命	ハワード・ガードナー	4000	1987年
みすず書房	4622017709	心の概念	G・ライル	5700	1987年
みすず書房	4622019310	行動の構造	メルロ＝ポンティ	5000	2002年

### 3 心の哲学の展開と認知科学

朝日出版社	4255003254	マインド	ジョン・R・サー ル	1800	2006年
岩波書店	4000228447	心の科学ガイドブック	G.アンダーウッ ド	3200	2004年
岩波書店	4000074458	ブックガイド〈心の科学〉 を読む	岩波書店編集部編	1200	2005年
岩波書店	4000271318	心・脳・科学	ジョン・R・サー ル	2300	2005年
NTT出版	4757100795	甦るチューリング	星野力	2400	2002年
北大路書房	4762822574	心理学の哲学	渡辺恒夫 村田純 一 高橋滯子	5800	2002年
北大路書房	4762822043	心とは何か	足立自朗 渡辺恒 夫ほか編著	5200	2001年
勁草書房	4326199415	心と認知の情報学	石川幹人	2100	2006年
勁草書房	432619894X	心の唯物論	D・M・アームス トロング	3900	1996年
勁草書房	4326100826	行為と出来事	D・デイヴィドソ ン	4700	1990年
勁草書房	432619880X	こころともの	H・ファイグル	2408	1989年
勁草書房	4326199245	シリーズ心の哲学 I 人間 篇	信原幸弘編	2800	2004年
勁草書房	4326199253	シリーズ心の哲学 II ロボ ット篇	信原幸弘編	2800	2004年
勁草書房	4326199261	シリーズ心の哲学 III 翻 訳篇	信原幸弘編	2800	2004年

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
工学図書	4769204655	人工知能のパラドックス	サム ウィリアムズ	2300	2004年
講談社	4061495194	心のマルチ・ネットワーク	岡野憲一郎	660	2000年
講談社	4061495828	ロボットの心	柴田正良	720	2001年
産業図書	4782801084	心の階梯	アーウィン スコット	3000	1997年
産業図書	4782801432	ハイデガーと認知科学	門脇俊介・信原幸弘編	3200	2002年
産業図書	4782801025	認知の微視的構造	アンディ・クラーク	4500	1997年
産業図書	4782800231	精神のモジュール形式	ジェフリー・A・フォード	2000	1985年
産業図書	4782851251	PDP モデル	D・E・ラメルハートほか	4600	1989年
産業図書	478280069X	コンピュータには何ができないか	ヒューバート・L・ドレイファス	4300	1992年
産業図書	4782800401	認知科学の計算理論	Z・W・ピリシン	3500	1988年
産業図書	478285126X	コンピュータと認知を理解する	T・ウィノグラード F・フローレス	2500	1989年
産業図書	4782801114	認知哲学	P・M・チャーチランド	4900	1997年
産業図書	4782851235	ヴィジョン	デビット・マー	4200	1987年
産業図書	4782800541	心の社会	M・ミンスキー	4300	1990年
昭和堂	4812203155	心の科学と哲学	戸田山和久 柴田正良 服部裕幸 美濃正編	2500	2003年
新思索社	4783501378	自我と脳	カール・R・ポバ	6800	2005年
新樹会創造出版	488158300X	ブレインワイズ	P.S.チャーチランド	3800	2005年
新曜社	4788509261	入門・マインドサイエンスの思想	石川幹人・渡辺恒夫	2800	2004年
草思社	4794209924	思考する機械コンピュータ	ダニエル・ヒリス	1800	2000年

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
TBSブリタニカ	448492126X	マインズ・アイ上	D・R・ホフスタッター / D・C・デネット 編著	3000	1992年
TBSブリタニカ	4484911278	マインズ・アイ下	D・R・ホフスタッター / D・C・デネット 編著	3000	1992年
哲学書房	4886790410	人工知能になぜ哲学が必要か	J・マッカーシー パトリック・ヘイズ	3398	1990年
東京大学出版会	4130130722	神経回路網モデルとコネクショニズム	甘利 俊一	2200	1989年
東京大学出版会	4130130692	心の計算理論	往住彰文	2600	1991年
三田出版会	4883381846	心を持つ機械	スタン・フランクリン	3800	1999年

#### 4 志向性とクオリア

岩波書店	4000265881	意識の哲学	信原幸弘	2800	2002年
NHK出版	4140015969	フッサール	門脇俊介	1000	2004年
角川書店	4047913200	脳のなかの幽霊	V・S・ラマチャンドラン	2000	1999年
勁草書房	4326153563	心は機械で作れるか	T.クレイン	4100	2001年
勁草書房	4326199474	行動を説明する	フレッド・ドレッキ	3400	2005年
勁草書房	4326152222	コウモリであるとはどのようなことか	トマス・ネーゲル	3000	1989年
勁草書房	4326153423	心の現代哲学	信原幸弘	2700	1999年
講談社	4061495259	考える脳・考えない脳	信原幸弘	680	2000年
誠信書房	4414120527	志向性	ジョン・R・サール	4800	1997年
青土社	4791755960	解明される意識	D・C・デネット	3800	1997年
青土社	4791759028	意識の〈神秘〉は解明できるか	コリン・マギン	2400	2001年
青土社	4791758609	ダーウィンの危険な思想	D・C・デネット	4800	2001年
草思社	4794207875	心はどこにあるのか	ダニエル・デネット	1900	1997年
創文社	4423101017	理由の空間の現象学	ト 門脇俊介	3800	2002年

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
筑摩書房	4480089837	クオリア入門	茂木健一郎	780	2006年
日経サイエンス	4532520576	脳とクオリア	茂木健一郎	3200	1997年
白揚社	4826901062	意識する心	デイヴィッド・J・チャーマーズ	4800	2001年
白揚社	4826900686	「志向姿勢」の哲学	D・C・デネット	5900	1996年
法政大学出版局	4588008307	心・身体・世界	ヒラリー・パトナム	4000	2005年
法政大学出版局	4588004557	理性・真理・歴史	ヒラリー・パトナム	4000	1994年
萌書房	4990070879	脳と精神の哲学	河村次郎	2400	2001年
萌書房	4860650115	意識の神経哲学	河村次郎	2800	2004年

## 5 脳と自由意志

岩波書店	400005449X	自我が揺らぐとき	トッド・E. ファインバーグ	3300	2002年
岩波書店	400002163X	マインド・タイム	ベンジャミン・リベット	2700	2005年
NHK 出版	4140910542	うぬぼれる脳	ジュリアン・ポール・キーナンほか	1260	2006年
NHK 出版	4140810343	共感する女脳、システム化する男脳	サイモン・バロン＝コーエン	2100	2005年
NTT 出版	4757160127	自由は進化する	ダニエル・C・デネット	2800	2005年
角川書店	4047915017	脳のなかの幽霊、ふたたび	V・S・ラマチャンドラン	1500	2005年
紀伊國屋書店	4314009241	ユーザーイリュージョン	トールノーレットランダーシュ	4200	2002年
紀伊國屋書店	4314009993	脳のなかの倫理	マイケル・S・ガザニガ	1800	2006年
講談社	406210041X	生存する脳	アントニオ・R・ダマシオ	2800	2000年
講談社	4062118785	無意識の脳 自己意識の脳	アントニオ・R・ダマシオ	2800	2003年
講談社	4061494392	〈意識〉とは何だろうか	下条信輔	740	1999年
青土社	4791761944	脳の彼方へ	ポール・ブロックス	2200	2005年

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
ダイヤモンド社	4478860513	感じる脳情動と感情の脳科学	アントニオ・R・ダマシオ	2800	2005年
筑摩書房	4480842659	脳はなぜ「心」を作ったのか	前野隆司	1900	2004年
東京大学出版会	4130602020	意識をつくる脳	腰原英利	3800	1997年
みすず書房	462207110X	シナプスが人格をつくる	ジョセフ・ルドゥー	3800	2004年

## 6 身体とロボット

アスキー出版局	4756133126	ロボットにつけるクスリ	星野力	1800	2000年
アスペクト	4757211015	アンドロイドの脳	ステイーヴ・グラント	2200	2005年
岩波書店	4000111515	ロボットの脳を作る	中村仁彦	1300	2003年
岩波書店	4000266411	ロボットと人工知能	三浦宏文	2100	2002年
NTT出版	4757160054	知の創発	伊藤宏司編著	2800	2000年
オーム社	4274500330	ブルックスの知能ロボット論	ロドニーブルックス	3200	2006年
オーム社	4274200655	知の科学 コミュニケーションロボット	人工知能学会編	3300	2005年
河出書房新社	4309612032	鉄腕アトムは実現できるか？	松原仁	1500	1999年
共立出版	4320120329	知の創成	ロルフ ファイファーほか	13000	2001年
共立出版	4320029720	ロボットは心を持つか	喜多村直	3200	2000年
講談社	4062574616	知能の謎	けいはんな社会的知能発生学研究会	980	2004年
シュプリンガー・フェアラーク東京	4431711597	脳・身体性・ロボット	土井利忠 藤田雅博 下村秀樹編	4000	2005年
筑摩書房	4480059385	ロボット入門	舘 暲	680	2002年
ナカニシヤ出版	4888488207	想像	月本洋 上原泉	2500	2004年
森北出版	4627827814	ロボットのこころ	月本洋	2400	2002年

7 ギブソンと環境主義

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
岩波書店	4000050095	アフォーダンスの発見	エレノア・J. ギブソン	3000	2006年
岩波書店	4000065122	アフォーダンス	佐々木正人	1200	1994年
岩波書店	4000056484	ダーウィンの方法	佐々木正人	3200	2005年
NHK 出版	414001881X	エコロジカル・マインド	三島博之	920	2000年
NHK 出版	4140910534	〈心〉はからだの外にある	河野哲也	1020	2006年
金子書房	4760895116	アフォーダンスと行為	佐々木正人	2000	2001年
金子書房	4760892818	状況のインターフェイス	上野直樹編著	4500	2001年
金子書房	4760892826	認知的道具のデザイン	加藤浩 有元典文編著	4200	2001年
金子書房	4760892834	実践のエスノグラフィー	茂呂雄二編著	4000	2001年
勁草書房	4326101539	ギブソン心理学論文集	J. J. ギブソン	6200	2004年
勁草書房	4326153644	ギブソン心理学の核心	境敦史 曾我重司 小松英海	2500	2002年
勁草書房	4326199407	心とことばの起源を探る	マイケル・トマセロ	3400	2006年
勁草書房	4326101318	ギブソンの生態学的心理学	T. J. ロンバート	7000	2000年
勁草書房	4326199113	環境に拡がる心	河野哲也	2800	2005年
勁草書房	4326199040	エコロジカルな心の哲学	河野哲也	2900	2003年
講談社	4061493353	知性はどこに生まれるか	佐々木正人	680	1996年
サイエンス社	4781903932	生態学的視覚論	J・J・ギブソン	4175	1986年
産業図書	4782801262	プランと状況的行為	ルーシー・A. サッチマン	2600	1999年
春秋社	4393360281	レイアウトの法則	佐々木正人	2300	2003年
新曜社	478850362X	誰のためのデザイン？	D. A. ノーマン	3300	1990年
新曜社	4788505800	ひとを賢くする道具	D. A. ノーマン	3600	1996年
新曜社	478850460X	テクノロジー・ウォッチング	D. A. ノーマン	2900	1993年
新曜社	4788507439	アフォーダンスの心理学	エドワード・S・リード	4800	2000年
青土社	4791758471	知覚はおわらない	佐々木正人	2400	2000年
東京大学出版会	4130111167	生態心理学の構想	佐々木正人 三嶋博之編	3200	2005年

出版社	ISBN	書名	著者名	本体価格	刊行年
東京大学出版会	4130111108	アフォーダンスの構想	佐々木正人 三嶋博之編訳	3800	2001年
東京大学出版会	4130860321	アフォーダンスの認知意味論	本多啓	5400	2005年
東京大学出版会	4130131095	仕事の中での学習	上野直樹	2700	1999年

## 私の五二年 前篇

### 二元・八重洲ブックセンター常務取締役 清水軍三

(この六月に八重洲ブックセンターを退職された清水氏より、人文会広報委員会が貴重なお話をうかがうことができました。本号と一〇一号にわたって掲載いたします。)

——清水さんは書店・取次店・出版社と三位一体の業界を経験したのですが、今までを振り返ってもそのような人は珍しいのではないかと、今回お時間をさいいただき、いろいろ貴重なお話をお聞かせ願えればと思いますので、よろしくお願いいたします。八重洲ブックセンター(以下八重洲B.C)でお仕事をしている清水さんの印象が強いのですが、八重洲B.Cに至る経緯からでもお話いただければと思います。

清水 一九五四年(昭和二九)四月、私は十五歳で岩波書店に入社し、「少年社員」として昼間は編集部で使い走りしながら、出版社のなにがしかの仕事をし、終業

時間になると食堂で簡単な夕食をかき込み、本所の定時制工業高校で機械実習を学ぶ四年間の生活をしました。月収八四〇〇円でした。一九五八年(昭和三三)四月、夜間工業高校・岩波書店ともに卒業する事になりましたが、岩波によく来店されていた神田の取次店鈴木書店の鈴木社長さんとも顔見知りだった縁で、誘いを受け入社し、「地方販売部」で静岡以西鹿兒島までの書店さんを担当、月収一一五〇〇円でした。約十年弱の取次店でした。人文・社会科学の専門取次店の経験が、神田村の仲間取次・多くの出版社・地方の書店までも知ることが出来、一方密やかに、日米新安保条約反対の国会デモに参加したり、六〇年代のあの混沌とした世相の中の日々で、私自身の支柱が形作られたと思っています。

一九六八年(昭和四三)二月、岩波図書販売信山社入社が初めての書店経験でした。現在の岩波ブックセンタ



清水氏

ーの場所が「岩波書店小売部」営業の地で、道路を挟んだすぐ隣の神保町交差点角に岩波ビルが建ち、一階・地階で売り場一〇〇坪に移転・独立、「岩波書店出版物以外の類書を選書し販売する」ということでした。岩波書店や鈴木社長にも指名依頼されて書店の店作りの計画に参加することになったのです。

一九七〇年（昭和四五）十月、信山社で二年半程した頃、鹿島出版会の商事部（書店部門）の取締役、元岩波書店役員が来店し、「東洋一の本屋を作る構想がありいま準備中」で、ぜひうちの会社に来てもらえないかと再三の来店、鈴木書店・信山社の社長さんにも話は通してあるとのこと、移ることになりました。初の超高層が竣工して二年目の霞が関ビル書店（二五坪）を皮切りに、超高層・新宿三井ビル（五〇坪）にも出店し、文具十八

坪兼業の店長として、次の渋谷東邦生命ビル書店（一七坪）に移り、一九七八年八月（昭和五三）まで、ビル内書店で、店売と外商を八年間経験したのでです。

そして翌月初め、八重洲ＢＣに呼ばれた日から誰でもがする開店準備・火事場の経験を味わい、開店の九月十八日を迎えました。途中新宿・渋谷の店に二年弱出向しましたが、八重洲ＢＣは二八年間でした。

——大変長きにわたってお疲れ様でした。今日はざっくりばらんに聞きたいと思います。岩波書店の「少年社員だった」と言われましたが、そういう人事制度があったんですか？

清水 そうです。当時「少年社員制度」というのがあり、社内の単純で補助的な仕事、例えば著者へ原稿を戴いてくるとかゲラ（校正刷り）を届けるとかは、必ずしも成人でなくても良いのではないかと、勤務時間中でも出来るかぎり勉学の便を計る、としたうえで夜学に通う高校生を四年の定年制で採用したのです。この制度は私の入社二年前（昭和二七）から始まり十年ほど続いたそうですが、途中社員希望者は再試験を受け、社員になる道も出来て、制度は廃止されました。講談社も同じ制度があったようです。

——出版社と機械の勉強では世界が大分違いますね。

清水 私は兄が夜間大学の理工に学んでいましたから当然のように従兄弟が入社している本所の精工舎（現セイコー）の養成工を受けましたが、筆記は受かりましたけれど実技試験が駄目で不採用に。本が好きだったこともあり父親が偶然見つけてくれた岩波書店の募集新聞広告を見て応募し採用されたのです。本所工業高校の定時制機械工作課程はそのまま進むことにしました。

——そうすると綿糸町ですね。

清水 綿糸町公園の左隣が精工舎で、その隣が本所工業高校。夜間四年間は工作機械の旋盤・プレス・設計図を学び時には浅草へ出掛け、ストリップ劇場のフランス座など詰め襟をマフラーで隠し、学びに行つたものです。昼間は大人の中でオロオロしていましたが、夜学は年格好も生活感も一緒に、江東・墨田の町工場に働いていたクラスの連中とする他愛のない会話で、気が休まりました。

——岩波書店の当時の雰囲気やお仕事の思い出などを。

清水 そうですね、入社して間もなくの昼休み、高三同志がロシア語を読み合っているのを見て驚きました。二つしか年齢が違わないのに凄い勉強をしているなあと、工業学校の英語は週一時間、数学はほぼ毎日の授業でしたが、英語の教科書ならいざ知らず目の前で見るレベル

の差はショックでした。会社内は労働運動も盛んでしたから、ロシアへの関心も高かったことも一因だったのだと思います。ともかく私も身近の本を少しでも多く読もう、他に解らなかつたら高三の先輩に聞こうと考え、編集部備え付けの読めそうな本を借り単純に「本が好き」ではなく「もつと知識を持たなくてはマズイ」と、読書する事に真剣になりました。毎夜二時まで寝ないで読書をする自分を課しました。

仕事では著者への原稿取りのため交通手段を知らなくてはと、都電の路線系統番号、②三田：神保町：曙橋・⑬新宿駅：神保町：両国・⑰池袋：神保町：数寄屋橋などを記憶し、用事の行先が告げられるとすぐ系統番号が頭に浮かぶようになりました。現在の地下鉄路線図をイメージするのと同じですよ。ラビット・スクーターの軽自動車運転免許証も取得し、外出も増え行動も広がると、中学までは徒歩通学でしたから、見るもの聞くもの皆新鮮で、経験できなかった世界が広がっていくのが解りました。そして、編集部を訪れた石井桃子・清水幾多郎・杉浦民平さんほか大勢の著者の顔を知り挨拶を交わし、出版社としての機能にも興味を湧くようになり、編集だけでなく校正・制作・資材・出版・営業と校正の朱筆記号や乱丁落丁がなぜ起きるかなども覚えていきました。

昼休みは食堂から戻ると教科書を広げ自習をし、外に出ては駿河台下・九段下・水道橋駅までの古書店歩きをし、本の量に驚き、古書店の扱う分野や特徴が少しずつ解るようになっていきました。

—— 少年社員清水さんの何でも吸収してやろうという当時の姿勢が感じられます。その後高校を卒業されて鈴木書店に入社されるわけですが、そのころの書店さん例えば紀伊國屋さんや三省堂さんの印象はどうですか？

清水 一九五四年（昭和二九）頃でしたから記憶が薄れていますが。紀伊國屋さんは都電路線⑩番に乗って新宿駅行、角筈で下車でした。新宿通りから一本うしろに入ったところで、犬屋さん（ペットショップ）と花屋さんを抜けると入り口で、知る人ぞ知るみたいな場所でした。店に入るとすぐ両側は新刊台で吹抜けの天井高、その先右側に木造の油敷きの階段があり、その先が鉤形の売り場でレジが二台在りました。階段を上ると、中二階になって手前が理工書とレジ台、奥に洋書がドーンと並んでいましたね。洋書が沢山置いてある本屋というのはあまり見たことがなかったから感心しました。非常に落ち着いたフロアでしたが、一階は人が入って混んでいました。

——三省堂さんはそのころは。  
清水 三角形のような建物だったと記憶しています。一

階は天井高ですぐに入ると真ん中にあるガラスのケースが大きく目立ちました。文具も扱っていましたが陳列ケースだったのだと思います。天井の高いところまで本棚があり、梯子を引掛けるための太い横棒があつて、そこに外国の本屋じゃないけれど移動して棚から本を取るわけです。狭い階段を上ると階段途中のウインドウに教科書が展示してあつたような、上を出版に使っていたかも、おぼろげです。

—— ありがとうございます。それではこれから鈴木書店時代のお話をうかがいます。高校を卒業して出版社から今度は取次店ですが、その頃の鈴木書店はどんな感じでしたか。

清水 岩波書店では玄関のある建物は蔦がはう石造りのがっちりしたものでしたが、裏は木造二階もありました。鈴木書店も木造二階建てで近所と同様で特に違和感はありませんでした。表はガラス戸が広く、裏側は継ぎ足しのバラックで一四〇坪位あり床は板張りでした。一階の間口は十六間（三〇M）くらいありましたが、道路に面して出版社に貸して、実際に使用していたのは表半分、店売と小部屋が仕入部でした。奥行きは十間（十八M）なかったと思います。建て増しの建物でしたから一階には木の支柱が沢山ありました。

私が居た地方販売部は、裏通りに面して十坪の板張り、全員で六名の職場でした。表道路面の二階に宿直室があり、鉄パイプの二段ベッドに二人ずつ、私ももちろん交代制で泊まりました。店売には読みたい雑誌も沢山ありましたから、暇潰しの楽しみでした。二階食堂の床板は節穴が抜けて売り場が見えるそんな建物でした。

宿直者は朝七時半には店頭の軒下にスノコを敷き、前日店内に引つ込めた新刊を運び出し、工夫しながら、目立つように売れるように陳列するのが役目、終わって店売の女性がハタキを掛ける頃朝御飯でした。店売のガラス戸は八時には開き、来店のお客さんに、応えるようにしていました。

一九六三年（昭和三八）以降に鉄骨コンクリート三階建が建つ前には、地方販売部も狭くなり斜め向かい五〇M位離れた三四ビルに移動しました。

——仕入や販売部で当然配達などの運搬があったのでしようが、その頃の車はどんな状況だったのですか。

清水 私が入社した頃は、都内販売部でダイハツ・ミゼットの三輪車が二台、単車が四台・あと自転車七台で、日本橋丸善の配達なんかは午前・午後の二回の配達は自転車でした。これが三七年くらいになると急速に改善され、会社全体でライトバン二台は午前中は仕入部、午後

は販売部の二部制で使用、他に軽四輪八台・単車五台、あとは自転車でした。もちろん車庫や駐車場など有りませんから、夕方になると軒下や室内の作業場に入れ、残りの自転車を机の間に入れるのが当たり前でした。

——当時の取引出版社は何社位あったんでしょうか？

清水 入社の日から仕入部で実習の集品を体験し、説明の中で二五〇社あると聞きました。初日相乗りし助手として本郷へ、四ツ谷以降は途中まででしたが、自転車に五〇キロ位の荷物はハンドルが浮きました。

集品は五コース 本郷・小石川方面（自動車）

四谷方面 （自転車）

銀座方面 （自転車）

神田（一）方面 （自転車）

神田（二）方面 （自転車）

——そのころの店売の様子はどうか。

清水 私は地方販売部でしたが、注文は店売から抜くので毎日午前・午後の利用で、店に来るお客様顔はお馴染みで、在庫場所を尋ねられてもお手の物でした。岩波文庫全点・新書五〇〇点の書名からでも番号からでも暗記し、抜き出しが出来るようになりました。店売は原則現金取引でしたが少しの掛け売り口座もありました。

小田急・町田の日堂さんなどは毎日来ていました。お

お客様の機動力のほとんどは、リュックを背負い風呂敷包みを胸に抱える格好の徒歩と、大きなスタンドと荷台に大きな箱を乗せた頑丈な自転車、自動車は稀でした。稀な自動車で、紀伊國屋書店仕入部の社員と田辺由男部長も同乗し、客注調達に毎日来店していました。

前橋から毎朝来るお客様がいました。その人は四〇代の便利屋さんで、複数の地元書店と契約し注文票を預かって神田村で調達、本だけでなく岩本町の方へも毎日だそうです。上野駅へ降りたら自転車で、神田村をあとこち回り調達した商品を荷台に積み、岩本町で荷物を増して上野駅前まで自転車を預け、荷物と一緒に列車に乗り込む。夕方までには前橋に着くのだそうです。それからそれぞれの店へ配達しながらまた注文取りだそうので、日焼けして色黒、見るからにタフな人でした。

—— 早いですね、人力は。

清水 世の中、そうすることが当たり前で皆な丈夫だったのですね。店売の女性は、お客様が棚から抜いた本を仕切票に記入、そろばんで計を出し代金を受けとりました。神田村仲間同志でも扱い出版社の重複はありますから、新刊は製本屋からですが、到着から陳列までのスピードは競い合いで今も同じでしょう。店売経験が長い人ほど客注の扱いの重要さも解って、八百屋と同じくお得意

意様には新刊入荷の声掛けも普通でした。

—— 清水さんから見た神田村の特徴というのは。

清水 小回り（スピード）が店の持ち味でしょう。自転車とトラックみたいな、小さいが故の利点で大取店と違った存在をアピールしていますよ。扱い出版社の対書店への小売店の役目を担っていることや、特定の出版社の拡販に協力もしているのは昔も今も変わらないと思います。分野が同じ他出版社を扱うことでそれぞれの店が専門色を出した品揃えをしていますね。専門色とスピード（小回り）が店の特徴・持ち味ですが、いま一つ社長さんの人柄が先かも知れない。当時も鈴木社長さんの部屋には、白水社の寺村専務が週一・二回見えまして、春秋社の野口役員・新栄堂の柳内社長なんかも。取次さんの鎌谷書店・明文図書・ほか、いつもどなたかが居ましたし、鈴木社長さん自らの手差しのお茶を飲んでいました。八重洲BCの小室部長とはこの頃の取次店神田図書からの知り合いでした。神田の一角に働いていた取次の人達は「みんな同じ村の住人」でした。大取次店に対して「攻めの対抗意識と守りの団結意識」が強かったように思えるのです。

—— そういった意味で、神田村の利用がかなりあった様子ですが鈴木書店ではどうでしたか

清水 神田村を利用されるお客様は一日一〇〇〇店と言われていましたが店売には毎日二五〇店位が来店していました。五〇%が都内・三〇%が郊外・残りの二〇%は地方のお店からでした。都内にあるお店は一〇〇%が客注、郊外店は四〇%が客注、地方店になると新刊・補充と客注で五〇%ずつで帳合大取次店からの送品では不足があった結果だと思えます。

先程の朝早くから来店の書店さんを見るにつけ、読者は書店に調達への信頼を寄せ、書店は神田村取次店のあそこなら在庫している筈と貴重な時間と労力を使ってくるわけだから、お互いが信頼を寄せ合つて神田村が成り立っていると思うので、そのところはキツチリと胸に受けて仕事しないといけないのだなあと思いましたね。

——清水さんがいた地方販売はどんな様子でしたか。  
清水 鈴木書店が岩波書店を始め、人文・社会科学書の出版社が主でしたから、そのようなお客様が多く専門書が置いてある書店との取引であり、札幌から九州の久留米まででした。私は静岡以西が担当でしたから、江崎書店、丸善支店、京都・三月書房、四国・宮脇書店、博多・積文館書店などでした。

全国の生協の取引が始まると鹿児島までになりました。大阪の旭屋書店も取引関係があり、現地では客注がいつ

到着するか解らないということで、東京に昭和二四年連絡事務所を設け、社員を駐在させていたのでそこに納品しました。

——旭屋書店の海地さんのお付き合いはこの頃ですか。  
清水 私が担当で毎日お会いしお話ししましたが、丁度一〇歳年上で昭和三七年に大阪の店に戻る前の四年間の付き合いです。大阪旭屋書店には何回か出張で訪問しました。国鉄大阪駅の真ん前、商店街の一角に細長い店があり、店の裏手通路を隔てた二階建ての事務所部分があり一階に仕入がありました。部屋の壁には八〇斤のリングを入れる木箱を重ね積みして書架にしていました。ほとんど空箱でした。お客様に見えない本は、商品ではない〴〵を實踐しているなと感心したものです。訪問し店内を見たときはいつも混んで利便性があり繁盛店でした。見た目五〇坪無かつたような店が、東京に人を置いて事務所を構えるというのには、商品調達が大阪といえども並々ならないことなのだと思いました。事務所は、お茶の水明大前を石垣添いに右に坂を下った途中、それこそ二坪か三坪ぐらいでした。

奥さんが店番、電話番号をして、海地さんが自転車に集品箱を乗せ神田村を回っていました。私も朝、届けられた注文短冊を在庫アリ・ナシに仕分け品出し、夕方自転

車で海地さんのところに届け、集めた商品は海地さんや集荷の手島運送が梱包して車に乗せていました。飯田橋から貨物車に乗せ、翌日午前中には大阪駅に着くという仕組みでしたから、飯田橋への締切り時間まで一生懸命に手だけが動いていました。旭屋書店駅前店は商店街の延焼で焼けましたが、借家のため建物がなくなったら立ち退かなくてはならない決まりとか、社長さんは棟梁たちと親しく大阪市内の大江さんが駆け付け一夜にして店舗を建て営業再開した「墨俣一夜城」の話聞いたことがあります。本屋の主人というのは、知識人・文化人として信頼されているのだなあとつくづく思いました。

——そのころは今と違って宅配便というのがないから運送業務は日通ですか。

清水 そうです、日通が主流でした。地方への輸送は国鉄を利用していましたが、貨車便・客車便があり、特殊混載として岡山・広島・高松は日通汐留、北海道・青森・北陸方面は日通飯田町でした。神田界隈では飯田橋が貨物駅で日通営業所も駅前でした。業界は日通・手島運送を指定業者として利用していました。昭和四一年頃から東名高速道路の建設が開始されオリンピック後四四年開通に、名神も開通するようにトラック輸送が可能になり、貨車便からトラックに替わりました。名古屋へはト

ラック輸送で西濃運輸・九州は博多運輸などでした。地方販売部と言うと少しは格好良いですが、荷造りは日常的で一五・二〇・三〇kgはミカン・リンゴ・月桂冠・赤玉ポートワイン・トリスの空箱、荷降しの本の保護のため荒縄で梱包でした。腰手拭いにサンダルが作業スタイルでしたよ。

——通信手段なんか、どの様でしたか。

清水 電話も地方は局の交換台利用でした。事故短冊の処理でも、単品多量の教科書注文などになると違いました。当時電話を掛けるにも、地方店へのダイヤル通話は通じてなく何番にお願ひしますと電話局の交換台に申し込みをするわけです。それを次々にやるわけ。だから電話する前に何を話すか順番にメモを書いておく、あとの細かい経過は事故連絡表という手紙を夕方書き速達です。毎日四十通ぐらい書き、帰り際神田郵便局に届けました。ポストに投函し集配に乗せるより早かった。昭和四二年頃ですよ、ダイヤル通話が出来ようになりましたね。

——ファックスはないですよね。

清水 ファックスはまだまだ先でしょう。電話は呼び出し、郵便は普通と速達、でも翌日には届かなかった。関西ぐらいでも速達郵便でも中一日ぐらいかな。

——いい時代と言えはいい時代ですね。それに本はあの

ころは売れた時代ですよ

清水 そうです。ともかく右肩上がり、入社（昭和二三）の頃でも消費ブームに支えられて売上は増加しました。三一書房（新書）「人間の条件」が新刊で入って、読み出したら止まらない。つぎの巻が待ち遠しくて、重版も取り合いのため、仕入は人が足らず急遽私が指名され、水道橋の線路脇モルタル二階屋に判取帳を持って取りに行ったりしました。翌年には全協（全国学生協同組合）の指定取次店に指名され地方単協の取引が増えたのは良いのですが、地域書店とのトラブルも多く発生、それでも前年比一〇%くらいの伸び、同じ年業界の運賃込み正味問題（地方店のみ定価の一分を正味に加算し全国一率）の実施もあり、それまでと違って部長は連日頭を痛めながら夕方には業界の集まりに出掛けるのを見送って、偉い人ほど大変だなあと思ったものです。でも仕事はメチャ忙しく二〇%、翌年（昭和三六）には三〇%、（昭和三七）で前年比三二%の倍々ゲーム。私の入社とともにですから、忘れられません。それと同じ体験を一九八六年（昭和六一）から、バブル崩壊前の神風が吹き荒れた時で、いずれも楽しい時代でした。

——その頃はまた、「百科事典」と「全集」がブームでしたよね

清水 所得倍増とか好景気に沸いて、東京オリンピックをめざして突っ走れみたいな。各社からいろんな企画で「全集ブーム」到来、翌年三六・三七年「百科辞典ブーム」が続きましたね。鈴木書店では平凡社・小学館共に取引がなく、仲間の諏訪書店が「国民百科事典」とかを、航空便でどんどん送ってもなお受注には間に合わない等の話ですから社員みんなが妬んだものです。大家族から核家族にどんどん進んでいって、家に本棚があつて全集を入れる。それがある種のステータスという時代だったから、これが売れて売れて河出書房の「世界の美術」や「現代の文学」、白水社の「新しい世界の文学」もでした。

——うちにも筑摩書房「世界文学大系」が並んでいただけ、この時期買ったんでしょうね。

清水 そうだと思います。あれは八年以上掛かったんじゃないかな、ともかく評判でしたから。三九年のオリンピックまで好況は続きましたが、物価も上がり当然のごとくオリンピック後が懸念されましたね。

——当時の地方の書店さんの印象などはいかがでしたか。

清水 一九六二年（昭和三七）私が二三歳の時初めて鈴木社長さんと出張することになります。四国・宮脇書店さんなどで、順次岡山・関西に戻るといふ行程でした。

——高松までいらした。

清水 朝特急で発って岡山から支線で宇野駅へそこから船に乗って高松まで一時間くらい、東京からだと言野駅まで十時間近く掛かりました。夕方、丸亀町の繁華街の中心の宮脇書店を訪問しました。間口五間（九M）・奥行一二間（二二M）六〇坪で改装直後でも明るい店でしたが、書棚がぎっしり埋まって売上実績や店構えでも四国で一番だと聞きました。その日は高松港の側の木賃宿と言える旅館に泊まりましたが、その当時松山の商科大と取引があったから翌朝松山へ、安藤さんの明屋書店を見たんですが、そのときは銀座にもあるような本屋であまりにもすばらしくてびっくりしました。松本さんとも挨拶しましたが、地方店でもずいぶんきれいな棚の管理された大きな店があるもんだなというふうに感心して、やはり通勤の時に見る東京の本屋ぐらいでは勉強が足りないなと反省、以来機会を見つけて全国のいろいろな本屋を歩くようになりました。

——ありがとうございます。ここまでは岩波書店から鈴木書店までの当時の様子をインタビューさせて頂きました。清水さんが二九歳までの歴史になります。後半は書店の信山社入社から八重洲BCまでの書店経験のすべてを語って頂く予定です。（ニュース一〇一号掲載予定）

## 図書館の資料収集力の向上を！

瀬島 健二郎

一身上のことで恐縮ですが、今年の三月末に三四年間勤務した東京都立図書館を退職した。新しい職場は、女子大学の司書養成課程の専任教員だ。実は、これまでの五年間、非常勤講師を務めていたが、いざ、フルタイムの先生になると、これまでとはガラッと意識が変わることとなった。まさに、私のような凡人なればこそ、「存在は意識を規定する」のである。これまでは、担当する科目を何とか無難にこなしていければ、という気持ちで働いていたが、これからは、大学の司書課程の全般に目配りをしていかねばならない。

こういう気持ちで、司書の養成を考えていると、当たり前だが、私が司書資格を取るために勉強した三六年前の図書館の状況と、今日のそれが全く様変わりしていることを、強く意識させられた。しかし、四〇年近くたってあまり変わらない世界もあった。

ごく簡単にまとめてみる。

- ・ 驚くべき変化 書誌情報（UBCIM、UAP）の充実、サービス面の変化
- ・ 変わらぬ世界 収集・選択

整理業務のコンピュータ化と通信技術の進歩により、図書館のサービス内容は著しく充実・拡大した一方、資料収集の部分についてはそれほどの充実は見せていない。以下、簡単に説明してみよう。

一 驚くべき変化は？

### 書誌情報の充実

図書館員が夢想したのは、全世界の出版物の情報が一手に入手でき、この情報を活用することで、世界中からどんな出版物であっても、利用者の求めに応じて入手を

可能にすることだ。このために、図書館員の世界的団体では、UBCIM（世界的な書誌情報の集積が可能となるよう、国レベルでの活動の調整や、標準化の推進を目的とする）と、UAP（いつでも、どこでも、どのような形態のものでも、人々が求める出版物を入手できるような体制作り）が推進されてきた。

かつて、二〇世紀の初頭に世界書誌の編集が試みられたが、実現しなかった。この「世界書誌目録」は、一九二二年にはその目録の収録件数は一二〇〇万点達したが挫折した。しかし、コンピュータと通信の進化により、事実上、UBCIMが実現しつつあるのだ。

日本国内では、自館が所蔵する資料の目録情報をインターネット上に公開し、そのデータを基に、横断検索システムが作られたり、総合目録が作成されるなどしている。これにより、かつてはそれぞれの図書館を訪れ、所蔵資料を確認するためには、各館ごとの目録カードや冊子体の蔵書目録を調査しなければならなかったものが、自宅のパソコンを使って検索・確認することが、大部分の図書館で可能となった。これにより、利用者は自宅にいながら、必要とする資料がどの図書館に所蔵されているのか、どの図書館で利用しコピーをとるのが効率的で経済的なのか、計画的に利用することが可能になった。

しかも、日本国内のみならず、全世界の多くの国の国立図書館や主要な図書館が所蔵資料の目録をインターネット上に公開している今日では、書名と著者名など、資料を特定するための正確な情報さえ分かれば、パソコンのキーボードを叩くだけで、資料を探し出すことが可能になった。旧世紀の姿が当たり前と思っていた人間には、驚くべき変化としかいいようがない。いわば、OPACの公開とコンピュータ技術の進歩により、単館の蔵書目録から世界書誌への発展が実現できたのだ。

#### サービス面での変化

UBCIMが実現することにより、UAPが現実のものとなった。

出版物を入手するには、当該資料の情報が必要である。なんとという出版物を見たいのか、出来る限りの情報を集積することで、出版物の情報を効率的に追及することが可能となった。これにより、図書館の基本的な働きである、資料・情報の提供という仕事の可能性が、格段に広がったのである。

今では、日本国内の公立図書館が所蔵する情報は、国立国会図書館が公開している総合目録ネットワークシステムを使えばかなりの資料の検索ができる。また、学術

専門資料を豊富に所蔵する大学図書館の資料は、国立情報学研究所の Webcat (総合目録データベース WWW 検索サービス) や Webcat Plus (NII 図書館ナビゲータ) を利用すれば、同様に検索が可能である。もちろん、細かい個別の事情はあるにしても、それぞれの図書館に向かなくても、所蔵資料の検索が可能になっているのである。

資料の所在の調査は、図書館にとって最も基本的な仕事であり、ある資料がこの図書館に所蔵されているのか、利用者が求める資料の存在を追及することは、図書館員にとって最も働き甲斐のある仕事である。そして、その資料を利用者に手渡すとき、達成感を感じない図書館員はいないであろう。

このように、提供する資料が、いわば従来は自館が所蔵する資料にほぼ限られていたものが、近隣の図書館、国立国会図書館、大学図書館などへと広がり、場合によっては海外の図書館から複写文献を取り寄せたりすることも行われている。今後、情報の整備とネットワーク化が、一層進むことで、利用者に提供する資料は、自館所蔵資料にとどまらず、多くのネットワークを介して結びついている図書館からの資料となるだろう。

提供する資料が広がったのみならず、サービス面での

変化も、著しいものがある。日本の公立図書館が発展を始めた一九七〇年代には、サービスのスローガンは、①貸出、②児童サービス、③全域サービスの三つが、当面の最重要目標とされていた。この三つのほかには、「図書館奉仕」ではレファレンスサービスを学んだ記憶があるに過ぎなかった。

それが、私が就職した都立日比谷図書館では視覚障害者サービスが日本の公立図書館では最初の取り組みとして取り組まれていた。その後はヤングアダルトサービスと多文化サービスが一九八〇年代に加わった。その後は変わることなく、サービスメニューは長く変わらなかつた。一九七〇年代から一九八〇年代にかけては、図書館サービスは、貸出冊数の増加という量的な拡大は図られたが、サービス内容の多様化という面では、正直に言って画一的であり、新しいサービスが付加されることは少なかったといつてよい。

そうした状況は、一九九〇年代から、大きく変わり始めている。そして、その変化は、今も続いているのである。

先ず、年齢別に考えると、児童サービスの対象年齢が下がっていった。従来は、絵本を読める年齢からと言うことで対象年齢の下限が四歳程度だったが、その年齢が

下がり、幼児サービスという名称でのサービスが開始されている。その逆に、高齢者サービスも検討がされ、さまざまな取り組みが始まった。

その中間の、中年層については、当初から子どもを持つ母親は主要なサービス対象として意識されていた。しかし、平日の日中は都心に通勤している父親、いわゆる社会人への意識的なサービスは、極めて貧弱であった。休日の貸出サービスの対象者としては認識されていたが、目的意識的なサービス対象者としては認識されていなかった。

これらの有職社会人を意識したサービスとして、ビジネス支援サービスが各地で取り組まれ始めている。また、ビジネス支援サービスの対自治体職員向けメニューとして、行政支援サービスが、ビジネス支援サービスに先行して、開始されている。

このほか、分野別のサービスとして、先述のビジネス支援サービスのほか、医療情報サービス、法律情報サービスが提唱され、先進的な図書館で実践が取り組まれている。

また、サービスの内容には、従来からの貸出サービス、複写サービス、レファレンスサービスに加えて、公立図書館と大学図書館との協力・連携関係の推進、専門情報

機関との連携が進んでいる。今後、この傾向は更に一層強まるであろう。

## 二 収集面の取り組み

こうしたように、所蔵資料の情報やサービス業務の両面での進化は著しいが、図書館資料の収集・選定の面はあまり変わり映えがしないのが実情である。

もちろん、出版情報のデータ化は、各取次会社やメーカー作成会社の努力により進展し、出版情報の整備は進んだ。これらの出版情報の整備に伴い、図書館資料の収集を組織的に行う傾向が強まった。

しかし、資料の選定行為それ自体を改善することは、進んだだろうか？ この部分は、正直言って、余り変っていないのではないだろうか？ 特に、公立図書館を対象に、考えてみたい。

### 資料収集方針

まず、基本的な問題として、どのような方針に基づいて資料収集を行っているのか、という問題がある。しかし、図書館の資料収集の基本方針である収集方針それぞれが、多くの図書館で作成されていないという、残念か

つ貧弱な状態である。

収集に関する方針がなくして、利用者からなぜこの圖書を購入し、もしくは、購入しなかったのかを質問されたとき、どのような回答をすることが出来るのか、はなはだ心もとないことになりはしないだろうか。今風の言い方では、説明責任が果たせるのか、ということである。このことは、すでに多くの指摘があるが、事態は一向に改善されていない。たとえば、一九八八年の日本図書館協会の調査によると、都道府県立図書館の八五%が収集方針を持っていているが、神奈川県内の市町村立図書館では四五%にすぎなかった。

二〇〇六年六月号の『みんなの図書館』では、選書基準の有無についてアンケート調査をしているが、対外的に公開している基準を持つてているのは、五四%にすぎなかった。

ただし、問題は収集方針だけにあるのではなく、図書館の設置目的は何かという点にある。特に、設立母体が明確で、利用者も限定されている大学、学校、専門の各種種の図書館は、目的が明確であり、資料の収集についてもサービス対象がはっきりしているもので、必然的に収集資料の範囲も明確になる。しかし、地方自治体が設置・運営している公立図書館の場合は条件が異なる。地

方自治体の住民は、地域特性はあるにせよ、全年齢層により構成され、その職業もさまざまである。したがって、住民の中にはある分野の専門家もいるわけで、どのような利用者像を想定し、これらの地域住民にどのようなサービスを提供するのがはつきりしないと、収集する資料の中身が決まらないことになる。なぜなら、収集する資料により、サービスの内実が決まるのだから。

また、図書館職員の仕事の担当も、通常、数年毎に異動があり担当者も変わっていく。一定の方針の下に、数年、十数年と資料を収集し続けることでその図書館の蔵書構成が形成されていく。担当者が異動するたびに収集する資料が変化するのでは、蔵書の継続性が疑われる結果となり、利用者の蔵書への評価が良好なものになるとは思えない。

公立図書館が資料収集方針を作成し、それを対外的に公開することで利用者の対話に努めることは、基本的な任務ではないだろうか。

#### 蔵書の評価

収集した資料が書架に並び、利用者は手に取って利用していくことになる。それで、収集作業が一段落することになるわけだが、それで終わりではない。

資料は、収集するだけでなく、当初の収集方針通りの収集がなされているかを評価することが必要である。これを蔵書評価というがあまり行われていない。最近の実例として、『公立図書館貸出実態調査二〇〇三報告書』（日本図書館協会、日本書籍出版協会 二〇〇四）があげられる。ここでは、いわゆるベストセラーの複本の収集状況を調査したほか、芥川賞等を始めとする定評ある賞の受賞作品を図書館がどの程度収集しているかも、調査した。その結果、芥川賞等の文学賞は別にして、意外にもこれらの社会的な評価の高い受賞作品の図書館での収集率が高くないという結果が出た。

ベストセラー作品の収集率は当然にも高いが、各種受賞作品の収集率の低さは意外であり、同報告書の中では選書への意識の弱さが指摘されている。蔵書を評価する方法はさまざまな手法があるので、それぞれの図書館での実践が待たれる。

### 三 終わりに

資料収集方針の作成と蔵書評価の実施についてのみ触れた。

まだ資料収集方針を作成していない図書館は、その成

文化と公開が当面の課題ではないだろうか。また、収集した資料を評価していくことも、日常の資料選定作業を見直すきっかけになると信じている。

こうした作業と経験の蓄積があれば、図書館員の選書力を高めることはできないと信じている。

（せじま けんじろう・文化女子大学）

# 平成一七年度人文会活動報告

面／詳細はニュース九七号に掲載

## 七・二〇

七月例会（文化産業信用組合本部会議室）

・「日販欠本補充システムについての説明」（経営相談

室長松本氏・主任柳氏・黒澤氏来会）

・「日販の現状と今後」（書籍部部长上間氏・書籍部課

長金田氏来会）

〔二〇〇五年〕

## 五・二〇

第三八回人文会総会／場所・鬼怒川グランドホテル別館／出席：正担当二〇社二〇名、担当変更三社三名、計二三名／議題：代表幹事挨拶／総会議長選出／二〇

〇四年度活動報告／会計報告／会則の改廃 会長職条

項の削除、臨時総会開催の加筆を承認／休会の承認・

青木書店、晶文社／今総会にて大江治一郎氏（東京大

学出版会）が退任され、佐藤英明氏（白水社）が第六

代の代表幹事に選出された

## 五・三一

新役員の取次店への挨拶

## 六・一六

六月例会（文化産業信用組合本部会議室）

## 六・二三～七・二二

予約店グループ訪問／札幌・千歳方面／宇都宮・仙台方面／金沢・富山方面／名古屋方面／熊本・鹿児島方

## 八・一九

八月例会（出版クラブ会館）

・「日販の現状と今後」（書籍部部长上間氏・書籍部課

長金田氏来会）

長金田氏来会）

## 九・二一

九月例会（文化産業信用組合本部会議室）

## 九・二六

「二〇〇六年出版五団体合同新年会」打ち合わせ（有

## 九・二六

斐閣七階会議室）／出席：人文会〓佐藤・新保／法経

会〓木村・竹内・前田／歴史書懇話会〓横井／国語国

文学出版会〓白石／大学〓市川

一〇・二三～一五

## 一〇・二七

「二〇〇五年人文会研修旅行」（福岡・久留米・熊本）

## 一〇・二七

「二〇〇五年全国図書館大会分科会」（水戸）／流通部

会出席：佐藤・杉田・持谷

一〇・二八

図書館員との交流会（茨城県立図書館会議室）／図書

館員八名・人文会五名

一一・一六

一月例会（文化産業信用組合本部会議室）

一二・一〇

「人文会ニュース九七号」刊行

一二・一六

二月例会（文化産業信用組合本部会議室）

・商品基本情報センターの説明（JPO大江氏）

〔二〇〇六年〕

一・一九

一月例会（文化産業信用組合本部会議室）

・東大駒場リニューアル新店舗説明会 流田氏（東大

生協専務補佐）・辻谷氏（東大駒場人文担当）射場

氏（大学生協東京事業連合）・横山氏（日販特販二

部課長）

・フタバ図書との研修会（文化産業信用組合本部会議

室）出席者：木村氏（店舗運営部）・安永氏（TE

RA広島府中店店長）・高橋氏（TE RA広島府中

店人文担当）・芝氏（MEGA人文担当）・毛利氏

（TE RA福岡東人文担当）

一・二七

「第二九回二〇〇六年人文社会科学系出版五団体合同

新年会」（ホテルメトロポリタンエドモント）

二・二二

出版共同流通所沢センター見学会

二・一五

二月例会（文化産業信用組合本部会議室）

三・一五

三月例会（文化産業信用組合本部会議室）

四・一九

四月例会（文化産業信用組合本部会議室）

・晶文社会活動へ復帰の御挨拶（内山氏・高橋氏）

四・二〇

「人文会ニュース九八号」刊行

以上

（書記幹事 新保卓夫）

## 二〇〇六年（第三九回）人文会年次総会報告

書記幹事 新保卓夫

二〇〇六年（第三九回）の人文会総会は、去る五月十九日に箱根・奥湯本「ホテルはつはな」において全会員社出席のもとに開催されました。

代表幹事には、昨年に引き続き、全会一致で佐藤英明氏（白水社）が選出されました。

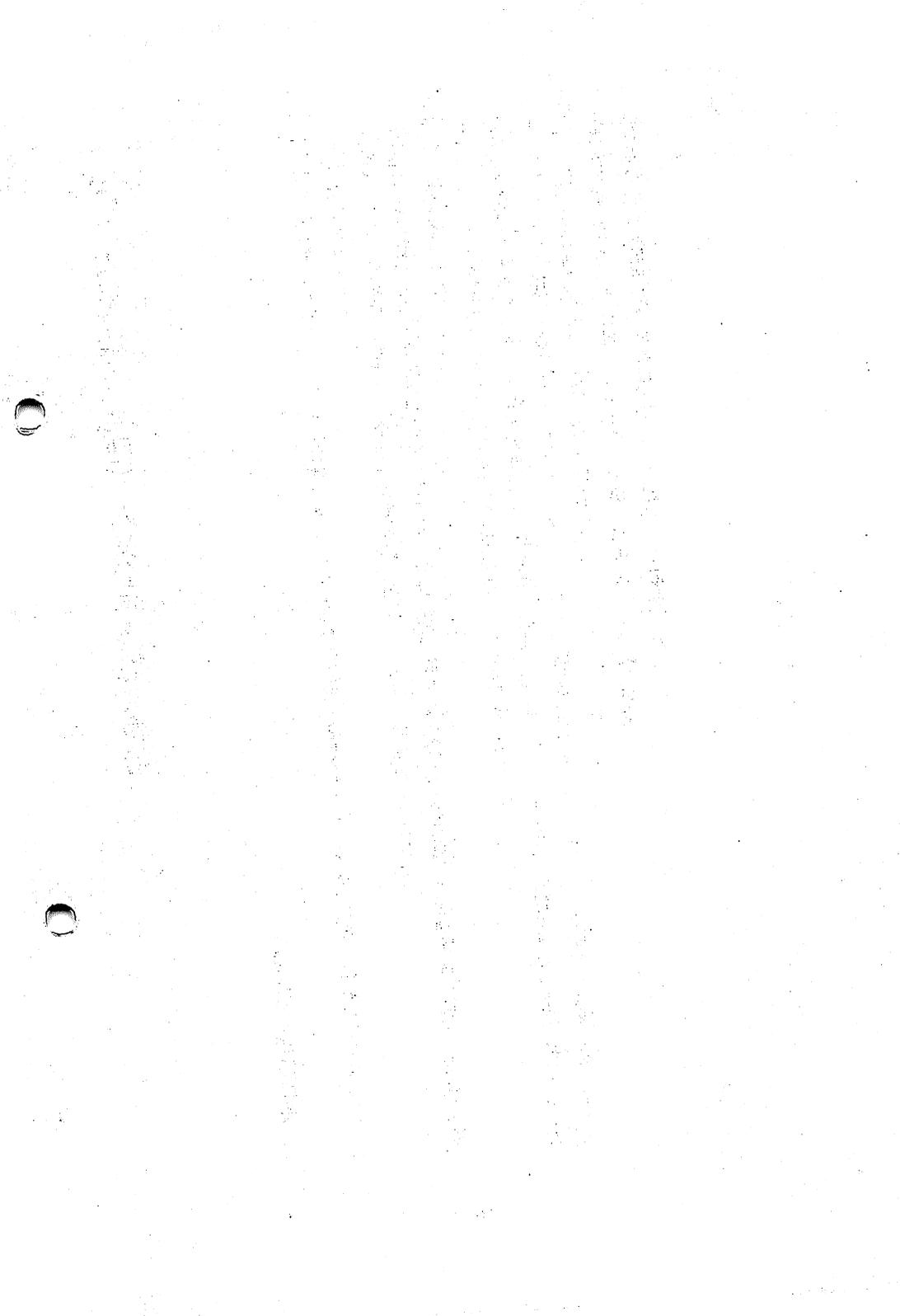
議事は、前年度の全般的な活動報告から始まり、会計報告、販売委員会・広報委員会の活動報告と続き、役員改選を行い、無事終了いたしました。

また、休会中でありました晶文社が今年度より復帰されることになりました。

委員会構成は、昨年に引き続き販売委員会の下に企画・研修・図書館の三グループ、広報委員会の下に広報・ホームページの二グループ体制を継続することになりました。なお、両委員会および各グループを横断的に機能させることによつて、新たな活動や幅広い活動に柔軟に対応していくことを申し合わせました。

担当者の変更があつた社は、ミネルヴァ書房（杉田氏↓三上氏）です。

役員及び委員会構成員の詳細は、「人文会名簿」をご参照ください。



# 委員会活動方針

## 販売委員会

販売委員会委員長 浴野英生

先期に引続き販売委員会を担当いたします。販売委員  
会では、先期から目指している委員会やグループにとら  
われない有機的な活動を更に推し進めて行きたいと思っ  
ています。テーマによって横断的なワーキンググループ  
を結成し成果を出せるように努力いたします。

人文会に対するご提案ご相談はどんなことでも、誰に  
でもお申し付けください。会員社の中から適切な担当社  
が窓口になり、できるだけ迅速な対応をいたします。

今期は以下のテーマを大きな目標として活動いたしま  
す。

一 人文書のジャンルの見直しがほぼ見えてきました  
ので、広報委員会と連動して、書店様・販売会社様  
が使えるものに作り上げていきます。

特にホームページグループとは連携を深め、今期  
中に人文会ホームページにUPしたいと思います。

二 書店様にとって、役に立ち喜んでもらえる研修の  
新しい方法を更に模索し、実際に行なってみます。  
例えば、現場のご担当者の方に集まっていたら、  
一で作成したジャンル表をもとに、会員社と人文書  
の品揃え等の意見交換を行なうなど。

三 図書館様に人文会の存在をアピールし、企画や選  
書等で上手く利用してもらえようコネクションを  
再構築したいと思います。

四 先期、書店様フェアを結構行ないましたが、コン  
セプトを詰めきれず実績のともなわれないものがあ  
りました。今期はその反省をもとに売れるフェアの企  
画・提案と実績を作りたいと思います。

今期もどうぞよろしくお願いいたします。  
委員会のメンバーは次のとおりです。

企画グループ

◎浴野英生(草思社)  
西谷能英(未來社)

橋元博樹(東京大学出版会)

駒谷光彦(大月書店)

研修グループ

○段塚省吾(紀伊國屋書店)

## 図書館グループ

藤代俊久（平凡社）

江波戸茂（日本評論社）

○持谷寿夫（みすず書房）

成田共助（法政大学出版社）

馬場正彦（吉川弘文館）

（◎委員長／○副委員長）

## 広報委員会

広報委員会委員長 鎌内宣行

今期も引き続き広報委員会を担当致します。広報委員会は「人文会ニュース」と「ホームページ」を柱に広報活動を担当します。

「人文会ニュース」については次号が一〇〇号目の刊行になります。先輩諸氏が人文書の普及を目指して刊行を開始したのが一九七三年の六月でした。その間、書店様や図書館様をはじめ関係各方面の方々にご愛読をいただき人文書の普及に役割を果たして参りました。

年内には、通巻一〇〇号目になるのを記念して記念号を刊行することが決まりました。委員会としてはこれが

今期の大きな仕事になります。また通常号についても年三回の刊行を目標に、記事内容の充実を図り書店様・図書館様を含め配布先の拡大を目指し発行部数も増やす予定で考えております。

「ホームページ」は確実に充実してきています。昨年五月にリニユールを実施し、基本図書検索・新刊検索（会員社）をはじめ会活動のさまざまな情報発信のツールとして、活用して頂けるように今期も再度のリニユールを予定しています。また、販売委員会が見直しをしている人文書中ジャンルをアップして棚の活性化の一助になるよう、書店様と協力して売り上げに直結するようなツールとしても考えております。

委員会のメンバーも新人が加わり新鮮な発想が期待できそうです。

広報活動は会の一方通行に終わることなくご意見やご批判なども広く公開していくべきだと考えます。「人文会ニュース」「ホームページ」は皆様にも開かれています。

今期の目標は積極的に皆様方を巻き込んだ広報活動にしていければと考えています。どうぞよろしく願います。

委員会メンバーは次の通りです。

広報グループ

◎鎌内宣行（春秋社）

三上直樹（ミネルヴァ書房）

高橋千代（晶文社）

吉武 創（勁草書房）

ホームページグループ ○平川恵一（筑摩書房）

小林文生（慶応大学出版会）

華園 斉（創元社）

（◎委員長／○副委員長）

## 二〇〇六年特約店グループ訪問報告

### 札幌・旭川方面

報告 鎌内宣行（春秋社）

● 期日 七月一三日（木）～七月一五日（金）

● 参加メンバー 佐藤（白水社）・平川（筑摩書

房）小林（慶應義塾大学出版会）・鎌内（春秋社）

● 訪問書店 紀伊國屋書店札幌本店・紀伊國屋書店

札幌口フト店・旭屋書店札幌店・三省堂書店大丸札幌店・北大生協クラーク店・リールなにわ・丸善札幌アリオ店・丸善札幌ビヴォ店・コーチャンフォーコミュニティ大橋店・コーチャンフォー美しが丘店・旭川富貴堂本店・旭川富貴堂メガ店・三省堂書店旭川店（計一三店）

● 感想…札幌地区は昨年に引き続きの訪問。旭川地区

は特約店グループでの訪問は久しぶりになります。

一三〇〇坪の紀伊國屋書店札幌本店が駅前に出店してから一年三ヶ月経過、札幌駅を出て大通りから駅を振り返り見渡せば旭屋書店・三省堂書店そして紀伊國屋書店と書店業界を長年リードしてきたナショナルチェーンが軒を連ねる風景に圧倒されます。

三店舗がそれぞれに客層を分けながら競い合っている状況は各店の店長からも説明を受けました。人文書に関しては後発ながらも最大坪数の紀伊國屋書店が品揃えも含め好調なようです。

一方、市内に二店舗の複合大型書店を出店したコーチャンフォーですが駐車場付きで広々とした店内レイアウトは北海道らしく雄大な風景を感じました。人文書の棚数も圧倒されるものがあります。両店長さんの意気込みも感じました。棚メンテナンスについては課題が多いよ

うですが、これからの期待したいと思います。

大通りについては丸善さん閉店で、老舗のリーブルな  
にわの頑張りが目につきました。

駅—大通り（繁華街）—郊外という商圏の構図はここ  
札幌にも定着しているようです。大通りに二〇一〇年ジ  
ュンク堂書店の出店が地元紙で報じられたのはつい最近  
です。札幌の書店地図はどう変わるのか目が離せなくな  
ってきています。

旭川では専門書を中心の店としてオープンした富貴堂  
メガ店が秋に一〇年目を迎えリニューアルを予定してい  
るとのこと人文会としてもぜひ応援したい店の一つです。  
今回大急ぎで一三店舗を訪問しましたが、お忙しいと  
ころ貴重なお時間をいただきました各店の皆様にはあら  
ためて御礼申し上げます。

## 仙台方面

報告 華園 斉（創元社）

●期日 六月二二日（木）～六月二三日（金）

●参加メンバー 橋元（東京大学出版会）・三上

（ミネルヴァ書房）水谷（未來社）・華園（創元社）

●訪問書店 ジュンク堂書店仙台北口店・丸善仙  
台アエル店・ジュンク堂書店仙台店・紀伊國屋書店仙台  
店・あゆみブックス仙台店・あゆみブックス仙台青葉通  
り店・東北大学生協文系書籍店・八文字屋書店・くまざ  
わ書店市名坂店・東北学院大学生協泉店・東北学院大学  
生協土樋店（計一店）

●感想…仙台市の書店地図は、この一〇年で様変わり  
した。大手ナショナルチェーンや東京などからの書店が  
入り、代わりに仙台駅前、繁華街の一番町からは地元書  
店が消えてきた。この点で地方都市の変化の、典型的な  
例とも映る。

仙台市の商業拠点はまず駅前。丸善、ジュンク堂書店  
二軒の、計三軒の大型書店が並び立つ。ここは市内から  
はもちろん、仙台経済圏四〇〇万人とも言われる岩手県、  
山形県、福島県からの集客がある。それだけに、品揃え  
に気を抜けない、とは三店舗の担当者共通の言葉。その  
中であゆみブックス二軒の売り方は鮮烈。南には紀伊國  
屋書店があり、市南部の太白区、若林区や隣接する名取  
市や岩沼市といったベッドタウンからの客に強い。

北へ目を移すと、人口が増加し続ける泉地区で一番店

の八文字屋がある。同地区は隣接する富谷町、大和町、利府町等のベッドタウン化が進むなか、大型SCの出店に伴い、書店の出店も多い。しかしながら、四〜五年前まで乱立していた単独店舗は、撤退が目立つ。これは、南部の太白地区でも同様。全国で大型店舗の出店が続くなか、今後も広がる傾向であろうか。

今回見た郊外店には、教育書や福祉書が多かった。地域的な特性（商圏内に教育・保育系学科あるいは福祉系学科の大学がある）を踏まえた上での品揃えであり、時代を捉えたものとも思える。そのなかで、その隣接領域としての、思想書、心理学書の展開はいかにして可能であるか。さらに大型化する郊外型店舗と交差する点が見いだせればと思う。

最後に、このように市場動向を書き連ねながら、なお強く心に浮かんできたのは、書店人の研究心と熱意だったことを記しておく。

## 大阪・和歌山方面

報告 能登 健（みすず書房）

● 期日 七月二三日（木）〜七月一四日（金）

● 参加メンバー 段塚（紀伊國屋書店）・吉武（勁草書房）藤代（平凡社）・能登（みすず書房）

● 訪問書店 ジュンク堂書店難波店・旭屋書店ならばCIITY店・丸善O・C.A.T店・丸善そごう心齋橋店・紀伊國屋書店本町店・ジュンク堂書店天満橋店・紀伊國屋書店京橋店・宮井平安堂・宮脇書店ロイネット和歌山店・T.S.U.T.A.Y.A W.A.Y ガーデンパーク和歌山店・旭屋書店イオンりんくう泉南店・旭屋書店堺P.L.A.T.P.L.A.T.T店・紀伊國屋書店堺北花田店（計一三店）

● 感想・近年、大型商業施設内への大規模新規出店が増加しており、近畿でもここ数年で多数の出店があった。今回は、その中でも普段は時間的制約の中で各社がなかなか伺うことができなかった阪南・和歌山を中心に訪問して現状の把握と課題を確認することを主眼とした。

坪数・立地条件ともに様々であったが、共通して言えることは二〜三人の社員の方で店舗を運営されているところが多数であるため一人で複数ジャンルを担当されており、なかなか人文書の棚のメンテナンスにまで手が回らない状況にあるということだった。また、現在において五〇〇坪前後でフル・ジャンル構成の店舗を作った場

合の人文書棚の位置づけの難しさというものも感じた。

今後は客層や土地柄などを考慮し、ジャンルを絞った棚構成にして、その分新刊のフォロワーを確実に行ってゆくなどの運営の仕方もあるのではないだろうか。ファミリー層が中心の店舗などでは、どうしても人文書は厳しく見えがちであるが、読者がいないわけではないはずなので、その方々にいかにして届けていけるかが書店様と出版社共通の課題となるのではないだろうか。そのためには、書店様からの店舗情報の発信と、人文会各社からの効果的な情報の提供が円滑に行え、相互にコミュニケーションがとれるような仕組みの必要性を感じた。

ある書店の方が「棚でお客様と対話する」ことを目指していると言われていたのだが、これは棚の大小にかかわらず可能なはずであり、そのような店舗づくりにいかに協力していくかを考えさせられた今回の訪問であった。最後になりましたが、御多忙のところ快くご対応下さいました各書店の皆様方に、この場を借りて御礼申し上げます。

## 四国方面

報告 成田共助(法政大学出版局)

● 期日 七月二〇日(木) ～ 七月二二日(土)

● 参加メンバー 平石(御茶の水書房)・新保(誠信書房)・馬場(吉川弘文館)・成田(法政大学出版局)

● 訪問書店 小山助学館本店・紀伊國屋書店徳島店・宮脇書店高松本店・宮脇書店南本店・紀伊國屋書店松山店・丸三書店本店・明屋書店松山本店・愛媛大学生協城北店・松山大学生協・明屋書店大街道店・金高堂本店・金高堂朝倉ブックセンター・トールン四国支店・日販四国支店(計一四店)

● 感想・四国遍路の第一番札所のある徳島に着いたのは八時四五分である。計画の段階では『蟬の音も煮ゆるがごとし四国かな』の猛暑を予想していたが、今年は記録に残る長梅雨のためあいにくの雨であった。二店舗訪問後、J・R・特急にて高松へ。

トールン四国支店と書店二店を訪問。残念ながら宮脇書店カルチャースペースはリニューアルオープン準備のため見学できなかった。(八月一〇日新装開店)。宮脇書店総本店に名称変更、四国の表玄関、珠玉の讃岐うどんの地高松で一泊する。

二日目、朝七時五〇分の高速バスで松山へ出発する。

書店六店（大学生協二店）と日販四国支店を訪問。子規、漱石、山頭火ゆかりの地松山で二泊目の宿をとる。

三日目、高速バスで高知に着いたのは一三時三〇分である。二店訪問。高知大学生協は時間の都合上（土曜日は午前中の営業のため）訪問できなかった。そして、高知龍馬空港より羽田一九時五五分着の便で家路に着く。

今回は市街地の書店訪問であったが、四国四県の移動は思ったより時間を要し、車内での昼食は二日となった。書店の現状としては郊外の大型店の影響を受け、老舗書店の苦戦が強いられ売上も横ばいからややダウンの厳しい状況である。今後の中心市街地の活性化が期待される。また、至るところで話題となったのが返品の逆送問題である。書店人の販売意欲を失わせ、販売機会の損失等、人文書・専門書版元にとっては課題と懸念の残るものとなった。メンバーの協力のもと四国一四ヶ所巡り遍路研修は無事終了。移動の疲れと今後の課題を抱えつつ帰路につく。（心なしか、人間が少し謙虚になったような気がする。……新保談）

最後になりますが、この度お世話になりました書店様、取次店様に厚く御礼申し上げます。

## 宮崎・大分方面

報告 浴野英生（草思社）

● 期日 七月一四日（金）～七月一五日（土）

● 参加メンバー 高橋（晶文社）・浴野（草思社）

江波戸（日本評論社）

● 訪問書店 旭屋書店宮崎イオン店・紀伊國屋書店

大分店・パルコ大分店・リプロ大分わさだ店・ジュンク

堂書店大分店・明屋書店大分セントポルタ店・晃屋堂書

店本町店（計七店）

● 感想…〈宮崎〉旭屋書店宮崎イオン店は宮崎駅より車で約一〇分の巨大ショッピングセンター二階に五〇〇坪で営業。社員は店長一人ですが、六月に撤退したブックジャンゲルや明林堂出身者が各ジャンル担当にいます。で仕入や棚のメンテナンスはまずまずできていたとのこと。他の郊外インショップの書店同様、ファミリー層が中心ですが、中高年も増えてきていて、法律関係書が売れているのが特徴だそうです。専門書は店の奥にソファ・テーブルを配置したゆったりしたスペースで展示されています。人文書の売上げはまだまだのようですが、可能性のある書店だと思います。

〈大分〉紀伊國屋七三〇坪、ジュンク堂六五〇坪、リ

プロ大分わざわざだ店二八〇坪のところに、九月明林堂大分本店が五〇〇坪で増床リニューアル。商圈を考えるとややオーバーストアの感は否めません。そのなかで各店とも商品構成の見直し等特色を出そうと努力されています。

紀伊國屋は入っているショッピングセンターの規模こそそれほど大きくはありませんが、スタイリッシュなデザインのお店と住宅やマンションが続々立っている地区を背景に平均単価の高い顧客が多いとのこと。ジュンク堂は六階と八階に分かれていた店舗を七・八階に統一し、品揃えとともに顧客の利便性を更に高めようとしています。リプロわざわざだ店は県内一のデパートがキータナントの総合ショッピングセンターで、ファミリー層にターゲットを絞っています。子供向けのコミックでは売上げ日本一になることもあるそうです。

その他、ジャスコがキータナントの若者が多いパークプレイスに出店しているくまざわ書店や商店街の既存店も、POPを積極的に活用するなど個性を出した店作りをされています。

人文会各社もそれぞれの書店の特色にあったアプローチが必要だと痛感した二日間でした。

最後に、お世話になりました各店の皆様に改めて御礼申し上げます。

## 編集後記

「人文会ニュース」九九号をお届けします。

好評をいただいている人文書の各ジャンルの現在の潮流を解説していただく「十五分で読むシリーズ」今号は河野哲也先生の「心の哲学」です。今号から参考文献を巻末にまとめてリストにしています。選書の参考になれば幸いです。

元八重洲ブックセンター常務取締役の清水軍三氏のインタビューは、半世紀以上にわたり出版界に貢献された歴史を振り返って頂きました。今号では岩波書店・鈴木書店時代のお話を伺いました。一〇一号では後篇として東洋一の書店の立ち上げに携わった八重洲ブックセンター時代のお話です。どうぞご期待ください。

図書館様送分には今回アンケートを挟さみこんであります。当会には図書館様により多くの蔵書をしていただく活動部署「図書館グループ」がございます。この機会にお答え頂ければ幸いです。よろしくお願い致します。九九号の次は一〇〇号が待ちかまえています。人文会の創立が一九六八年で「人文会ニュース」は一九七三年に創刊されました。一〇〇号は記念号として特別企画を考えています。

「人文会ニュース」は年の三回の刊行です。人文会ホームページとともに会活動の報告と、人文書の普及をめざし刊行して参ります。ご意見など頂ければと存じます。

(広報委員会)

# 人文会会員名簿

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-24 白水社内

2006年9月末現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
慶應義塾大学出版会	小林 丈生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁草書房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	高橋 千代	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	持谷 寿夫	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0054	千代田区神田錦町 3-6 石沢ビル 3F	3296-1615	3296-1620
未来社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

(休会：青木書店)

代表幹事 佐藤英明  
 会計幹事 平石 修  
 書記幹事 新保卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会 ・企画グループ ◎浴野英生・西谷能英・橋元博樹・駒谷光彦  
 ・研修グループ ○段塚省吾・藤代俊久・江波戸茂  
 ・図書館グループ ○持谷寿夫・成田共助・馬場正彦  
 広報委員会 ・広報グループ ◎鎌内宣行・三上直樹・高橋千代・吉武 創  
 ・ホームページグループ ○平川恵一・小林丈生・華園 斉

【新装版】  
**現代政治の思想と行動**  
 丸山眞男著  
 〈戦後民主主義〉は  
 ここから始まった——

◆  
 著者の没後10年を記念して、  
 満を持しての新組・新装カバー装で登場！  
 「抑圧の移譲」、「無責任の体系」、「不作為の責任」  
 などの概念による鮮やかな分析で、戦後日本社会に  
 大きな影響をあたえたロングセラー！  
 3990円

---

**私に触れるな**  
 ノリ・メ・タンゲル  
 J=L・ナンシー著 荻野厚志訳  
 レンブラントらによって描かれた、復活したイエスと  
 マグダラのマリアの邂逅の場面をめぐる考察。  
 イメージ論によるキリスト教の脱構築。  
 2100円

**未来社** ※表示価格は税込  
 東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002  
 tel.03-3814-5521 [www.miraisha.co.jp](http://www.miraisha.co.jp)

**ポーランドのユダヤ人 歴史・文化・ホロコースト**  
 タイフ編 日記や多数の写真、抑制された記述で、今日にまで  
 続く歴史の中にホロコーストを捉える。 阪東宏訳 三六〇円

**藤田省三 対話集成 1**  
 一九六〇年代、安保闘争とは何だったのか。同時代の政治状  
 況をめぐる鶴見俊輔、丸山眞男他との対話。全三巻。元九〇円

**大塚久雄 人と学問** 付 大塚久雄「資本論講義」  
 石崎津義男 近代資本主義を探究した大塚久雄。戦前から戦  
 後にわたる学問と人間像を、聞き書きをもとに描く。二五〇円

**人はかつて樹だった**  
 長田弘 いま私たちは。日のかさなりのなかで編まれた著作  
 二十一篇。大切なことだけが書かれている詩集です。一六〇円

**みすず書房** (税込)  
 東京本郷5-32-21 <http://www.msuz.co.jp>

**9月刊行開始!** 【創業150周年記念出版】  
 企画編集委員 小和田哲男・関 幸彦・森 公章・吉田 裕  
 四六判・上製・カバー装・平均三二四頁／各巻二六二五円  
 ● 第1回記本(9月)以降毎月1冊刊行／『内容案内』送呈

**戦争の日本史** 全23巻

人間にとって戦争とは何か？  
 古代の動乱からアジア・太平洋戦争まで、  
 日本の内乱・戦争の実態に迫る新シリーズ！

**秀吉の天下統一戦争**……………小和田哲男著

**吉川弘文館** 価格  
 税込  
 東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

**ミネルヴァ書房**

**平泉澄** 我々のために  
 みるくのため  
 につくさなむ

若井敏明著 文藝春秋ほかで紹介注目。  
 平泉澄初の本格的評伝。 三一五〇円

**澤柳政太郎** 新田義之著 ● 随時随所楽シマザルナン 毎  
 日新聞ほか書評掲載。成城教育創始者の近  
 代教育確立に費やした生涯。 三一五〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
 TEL075-581-0296 価格税込み / 宅配可

## 感覚の幽い風景

鷺田清一 とらえたと思えば零れ落ちてゆく、そんな感覚の深淵へ。身体論の名手の魅力あふれるエッセイ集。◆1785円

## いまこの国で 大人になるとうこと

莉谷剛彦編著 玄田有史、紅野謙介、小谷野敦、斎藤環、島田裕巳、武田徹、西研、茂木健一郎、山田昌弘ほか、第一線で活躍する16人からのメッセージ。◆1785円

## 飛び道具の人類史

火を投げるサルが宇宙を飛ぶまで

A.W.クロスビー／小沢訳 人類の繁栄を、「ものを投げる能力」から探究。人類進化の足跡から、感度探索や宇宙開発までを壮大なスケールで描く。◆2940円

## 利己的な遺伝子

(増補新装版)

R.ドーキンス／日高、他訳 生物観を根底から揺るがし、世界の思想界を震撼させた天才の生物学者の洞察。◆2940円

## 紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11  
営業TEL03(5469)5918 表示価格は税込  
<http://www.kinokuniya.co.jp>

## 天皇の軍隊と 日中戦争

日本軍事史研究の精華を集成する

藤原彰著 日本現代史・軍事史研究をリードした著者晩年の論文や歴史家としての回想を収録する。2940円

## 王と鳥

スタジオジブリの原点  
高畑勲・大塚康生・叶精二・藤本一勇著 仏のファンタジー作品が現代に放つ警告・問いかけとは。1575円

## さよなら、消費社会

カルチャー・ジャマーの挑戦 カレ・ラースン著 消費する日本人へ新しい文化と価値観を提案する。2310円

## [増補新版]アインシュ タインは語る

アリス・カラプリス編／林一、林大訳  
488頁に大增補の決定版。人間アインシュタインに出会える。3675円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9  
電話03(3813)4651(代表)  
<http://www.otsukishoten.co.jp/> (税込)

## 慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp>

## バブル文化論

〈ポスト戦後〉としての一九八〇年代

原宏之著 《バブル文化》に注目し、前後の政治・経済状況にも目を配り、「八〇年代」の特殊性を浮き彫りにする。●2100円

## 近代フランスの誘惑

物語 表象 オリエント 小倉孝誠著

19世紀という時代に、人びとは何を夢見ていたのだろうか？ バルザック、ロダンらが生きた歓楽の社会を読み解く。●2940円

## 評伝 岡部長職

明治を生きた最後の藩主 小川原正道著

和泉岸和田藩最後の藩主の波瀾に富んだ生涯と激動の時代を描いた評伝。●3990円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】  
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

●現代の先住民の多様な生き方と歴史観の比較分析  
松山利夫著——四六判・二三三頁・二五二〇円(税込)

●ブラツクフェラウエイ——アボリジナルの選択  
二〇〇年余の植民期を経て今に至る先住民の多様な生き方。  
●アメリカ先住民学の研究動向を知るための好著  
鎌田 遵著——四六判・三六八頁・三九九〇円(税込)

●「辺境」の抵抗——核廃棄物とアメリカ  
米国植民地主義の不正義の歴史と現在の状況を照らし出す。  
●アメリカ研究のものをミナスの視座捉えなおす最先端の研究  
章永智津子・永原陽子編——菊判・五六八頁・四九三〇円(税込)

●新しいアフリカ史像を求めて——フェミニズム  
歴史のジェンダー化と世界史への新たな挑戦をめざす。

## 御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751

# 「自由な時代」の 「不安な自分」

—消費社会の脱神話化

**三浦 展** ブランド論、ケータイ論、万博論、アメリカ論……「下流社会」の造語者が、消費社会のあれやこれやを解説。多様化する現代の見取図。 1890円  
*Atsushi Miura*

**仕事をしなければ、  
自分はみつからない。**  
—フリーター世代の生きる道

三浦展の“迷える若者”論。 1680円

**晶文社** 東京都千代田区外神田 2-1-12  
TEL 03-3255-4501 (価格に税込)  
<http://www.shobunsha.co.jp/>

# 盛山和夫 リベラリズムとは何か

ロールズと正義の論理 達成と限界を見極める強靱な思索。3465円

土場 学・盛山和夫 編著  
**正義の論理**

数理社会学シリーズ4 社会の規範的構想を「正義」で表象。3465円

小路田泰直  
**国家の語り方**

歴史学からの憲法解釈 徹底した内在の論理で強さを立証。2940円

\*価格税込  
**勁草書房** TEL 03-3814-6861  
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1  
<http://www.keisoshobo.co.jp>

# 臨床心理士資格試験 問題集 [平成18年版]

(財)日本臨床心理士資格認定協会監修  
第1回から平成17年度までの試験問題  
526題と解答を一挙に掲載。 1890円

**臨床心理士になるために**  
[第18版]

(財)日本臨床心理士資格認定協会監修  
資格取得を目指す人の必携マニュアル。  
協会責任監修による公式ガイド。 近刊

# アニメーションの 臨床心理学

横田正夫著 世界的に注目を集めている日本のアニメーション。作り手たちが映した心の世界を臨床家が探る。 3990円

**誠信書房** 東京都文京区大塚3-20-6  
TEL.03-3946-5666 (税込)

シリーズ(全9巻) 刊行開始  
**思想の身体**

島園進/黒住真/鎌田東二編  
「愛」「悪」「霊」「徳」「性」「死」  
「狂」「戒」「声」

九つのキーワードから、日本人の思想の源流を探る。細分化された学問領域を横断する包括的な試み。

〈愛〉の巻 末木文美士編著  
〈狂〉の巻 町田宗鳳編著 各2100円

# アンチ・ネオコン の論理 ●M.レナード

山本 元訳 ネオコン主導の米国の世界戦略の欠陥を暴き、欧州の論理を基礎に国際政治の新秩序を説く。ジョセフ・ナイ推薦 1890円

**春秋社** 東京都千代田区外神田2-18-6  
☎03-3255-9611 (価格に税込)  
<http://www.shunjusha.co.jp/>

出版業界有名人多数登場の業界実録！

# 昭和出版残侠传

嵐山光三郎 (9月6日発売) 1575円

雑誌創刊ラッシュ前夜の80年代前半。有名出版社を退職し、新たに会社を起した著者と仲間たち。出版界躍動の時代を描く、疾風怒濤悪戦苦闘の嵐山版・出版風雲実録。

出版業界最底辺日記  
工口漫画編集者「嫌われ者の記」

塩山芳明  
南陀楼綾繁編  
ちくま文庫・998円

サービスセンター 筑摩書房 048-651-0053  
\*税込 <http://www.chikumashobo.co.jp/>

## 創元社

最新刊

### プロカウンセラーが読み解く 女と男の心模様

男女間に生じる葛藤やコミュニケーションの齟齬はなぜ生じるのか。上司と部下から友人関係、浮気、離婚、セクハラまで、プロの目で読み解くシリーズ最新刊。

●東山弘子+東山紘久 1,470円

好評シリーズ

### プロカウンセラーの 聞く技術

### プロカウンセラーの 夢分析

### プロカウンセラーの コミュニケーション術

ベストセラー『聞く技術』の著者が説く  
専門家ならではの秘訣、極意の数々。

●東山紘久 各1,470円

<本社> 大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込価)  
Tel. 06-6231-9010 Fax. 06-6233-3111  
<支店> 東京都新宿区神楽坂4-3 Tel. 03-3269-1051  
<http://www.sogensha.co.jp/>

演劇、演奏、アニメ、写真……、  
表現する身体の驚異に大接近！

# アート／表現する身体

アフォーダンスの現場

佐々木正人編  
A5判・3360円

「指揮者の身体の動きと音楽の関係」「演劇・舞踏がなにかを表現するとき」「アニメーションのリアリズムはどこから生まれるか」「アフォーダンス理論による若手研究者の論考と、一線の表現者と

東京大学出版会  
東京都文京区本郷7-3-1 東大構内 [価格税込]  
TEL.03-3811-8814 FAX.03-3812-6958 <http://www.utp.or.jp/>

## 衝撃の ノンフィクション



# 決定的証拠をもとに犯人を特定！ 世田谷一家殺人事件 侵入者たちの告白 齊藤寅著

事件を追いつづけたジャーナリストが突きとめた、犯罪グループの正体——世田谷事件以降、日本社会を脅かしはじめた新たな恐怖への警鐘を鳴らす一冊。 定価1470円

草思社 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8  
☎03(3470)6565 定価は税込